

柔道部十八景

# 柔道部十八景

## 一 和田氏の柔術

鎌 田 燦 吉

慶應義塾で柔術が學生の間に行はれるやうになつたのは、塾が三田へ移つてから五、六年後のことと、それ迄一時武藝といふやうなものは廢絶してゐた。

明治七年に和田義郎氏が、福澤先生の旨を受けて、三田山上の自宅に數人の幼稚生を預つてゐたが、後三田四丁目に引越してからは、數十名の生徒を收容して、その教育に當つてゐた。所が生徒の數も次第に増して來たので、明治九年の頃になつて、又々今の圖書館の在る邊に建つてゐた家屋に移り、規模を擴張し、此の時から其の塾を幼稚舎と呼ぶやうになつた。幼稚舎とはいふものゝ、小學の程度ばかりでなく、後には中學の課程をも教授してゐた。それで少年が相當大きな生徒となつても、矢張和田先生夫妻の膝下で、中學程度の學科を學んでゐたのである。

この幼稚舎の初代の舎長であつた和田氏は、紀州和歌山藩の人で、柔術は關口流の達人、藩では奥詰隊に屬し、藩主の護衛士の一人として、京都詰をも命ぜられてゐた。後に藩から選抜されて、鐵砲洲の慶應義塾で學んで居たのである。さういふ中に塾は三田に移つて、それから和田氏も塾の教師の職に在つたが、今申すが如く和田氏は武藝の道にも長じ、膂力も亦人に勝れ、殊に柔術に達してゐたので、自然幼稚舎の生徒に柔術を教へるやうになつた。道場は三十六疊位の廣さ

で、少さい子供連が和田先生を中心にして、毎日午後柔術をやつてゐた。これが抑も三田の山で柔術を遣り出した最初である。

その頃私は既に塾の教師をしてゐたが、國に居つた時、九歳か十歳の頃から柔術を修業し始めたのである。私の和歌山藩では、當時組打とやはらが盛に行はれてゐた。組打とは大小の木劍を以つて立合ひ、敵を組み伏せる術で、これは重に士族が遣つたものであり、やはらは即ち柔術で、士民の別なく一般に行はれてゐた。兩方共型もあれば亂捕等もある。東京に來る前に、私はさういふ覺えがあつたので、柔術に幾らか趣味があつたと見へて、幼稚舎の道場へも毎々顔を出して稽古したことがある。

今でも忘れないが、和田氏の一番の妙技は、干支タヌミと云つて、自分は道場の壁に附着して立ち、十二人の子供に押へ附けられてゐる時に、一寸壁に足を掛けて前方に身を翻へし、倒さに自分の身を放出する技であつた。これは中々難しいものであつたが、和田氏は大きな體格でありながらそれを見事にやる。餘程名人であつたと思ふ。私も亦その眞似をして、數數之を演じたことを記憶してゐる。

その頃柔術を遣つてゐた生徒の中で強かつたのは、今覚えてゐる子供では、福澤一太郎、同捨次郎、今泉秀太郎、岩崎久彌(男)、水町義成(後に小代と改姓)、早川政太郎、古川岩吉、それから馬場喜久衛(辰猪氏の弟)と云ふやうな少年連であつた。中で私がズット大きく、又尙大人の永田一二は餘程上手でもあり、強い人でもあつた。さういふ風に皆和田さんを大將にして、柔術をやつてゐた。

その内に明治十四、五年頃、紀州から關口柔心といふ先生が來て、柔術を教へるやうになつた。これが二十四、五年頃迄續いたかと思ふ。この人は即ち師範關口家の後繼者で、其の先祖が支那人から柔術を傳習して、柔術界に一派を開いたといふ、彼の關口柔心の末孫である。同じく柔心と云ふは先祖の名を繼いだからである。併しあういふ豪い先生ではあつ

たが、此の人に就て今少しく申すと、同氏は一時非常に零落して、和歌山で人力車夫とまで成り下つて居たことがある。それは何ういふ譯かと云ふと、所謂時勢の變遷で、柔術其他の武藝は、明治の初期時代には全く廢絶して、武藝者には收入の道も無くなつたからである。家祿の代りとして、多少の公爵位は貰つたにしても、其の時は多分之も失くしてゐたのであらう。斯る名人も用途が無くなつては仕方がないものである。偶々同氏が幼稚舎に聘せらるゝに至つたのは、同氏の爲に塾の柔術が助けの神であつたと共に、塾も亦同氏を得て大いに斯道の發達に資したのである。

それから明治二十七年頃かと思ふが、越後新發田の人で、鐘巻流の濱谷といふ人が、塾へ來て二十九年まで幼稚舎で柔術の稽古を指南してゐた。前の舎長和田氏は明治二十五年に長逝し、この時は既に坂田實氏舎長の時代である。

幼稚舎の柔術は、右に述べた通りであるが、また一方本塾の方でも、さうかうする内に、明治二十五年頃であつたらうか、幼稚舎のよりも稍々大きい道場が、昔の演説館の後ろに出来るやうになつた。尤も其の數年前から學生の中で柔術の心得ある有志の者が幼稚舎の道場に集まつて、新しい柔術の稽古をやつてゐて、講道館から當時嘉納流で一二と言はれた山下義詔氏を迎へて師範としたことがあつた。柔道部といふものの基礎が築かれたのは此の時からである。道場が出来てから柔道部の形態が全く備はつたと言ふべく、學問を勵み柔道で身體を鍛へ、心身の健全を計らうといふ幾多の健兒について、修業上大なる便宜を得た譯である。

併し、其後塾生の數が段々と多くなり、隨つて部員も増して來たので、今までの道場では狭隘を感じるやうになり、其代りとして明治三十七年、綱町の新運動場に新しい道場が出來た。其頃から内田良平氏が山下氏に代つて、暫く來て居られたが、明治三十九年の春から今後の飯塚國三郎氏が聘せられて師範となり、柔道部は年と共に盛大を加へ、昭和四年の宮城内に於ける天覽試合には、塾の道場からも四名の選士を出したといふ程である。是は私の記憶の概略だが、近頃の新しきことは、寧ろ諸君の方が詳しく知つてゐる筈である。(談話筆記)

## 二 草創時代の塾の柔道

生 田 定 之

今から四十五年も昔のことであるから、能くは覚えてゐないが、三田の山で塾生が講道館の柔道をやり出したのは、明治二十年からであつたと思ふ。以前には和田さんの柔道をやつてゐたさうだが、それが暫く途切れてゐた。私は二十二年の十二月に学校を卒業したのだが、その出る一年ばかり前に、私共何人かの連中が集まつて、幼稚舎の道場で稽古を始めたのである。最初は塾生であつた二段の南摩綱夫と、初段か二段の小南英策、この二人が先達で始めたのであるが、その中に講道館から誰か先生を迎へようといふことになつて、南摩小南の兩氏が交渉して、確か二十二年に講道館五段の山下先生に来て貰ふことになつたのである。

當時はまだほんの始まりであつたから、級なども設けて居らず、私なども柔道の免状といふやうなものは貰はなかつた。在學中は聖坂に住んでゐたが、宿に歸つても時には自分の部屋で、亂暴な稽古をしたこともある。或時遊びに來た一人をつかまへて、冗談半分逆十字で咽を絞めつけたが、それがうまく入つたものか、其の人はそのままグツと落ちて了つた。サアさうなると活などまだ充分に習つてゐなかつたので、却つて此方が慌て出し、何うしようかと一旦梯子段を降り掛けたが、その途中フト胸に浮んだのが、豫て先生方のやる活の方法であつた。それを想ひ出したものだから、直ぐに取つて返して活の真似かたをして見たら、幸にも氣息を吹き返したが、あんな吃驚したことはなかつた。無論私もそれ迄には先生や仲間の者に、三度ばかり落された経験があつたので、つい何氣なくそんなことをやつて了つたのであつた。

又柔道の稽古を終つた後で、能く相撲を取つたものである。相撲になると私には幾分自信があつた。柔道では敵はなかつた連中に對しても、相撲では私の腰投が屢々功を奏したことがある。總てが約半世紀も前のことと漠としてゐるが、此際部史の編纂されるといふことは、大いに喜ぶべきことである。(談話筆記)

### 三 在塾當時を顧みて

濱 口 擧

私は明治拾八年に和歌山から上京して、その翌年慶應義塾に入り、廿四年七月に正科を卒業した者であるが、在塾當時は總ゆる運動に興味を有して、柔道でも、ボートでも、野球其他陸上競技、何にでも手を出したのである。今から考へて見ると、當時は義塾の體育會の前驅時代であつた。

その中で柔道のことについて申せば、當時本塾には道場もなければ、柔道部といふものも出来てゐなかつた。唯和田さんのが幼稚舎で、關口柔心といふ先生が子供達に柔術を教へてゐた。この關口氏は和歌山藩お抱への有名な柔術師範の家柄である關口家人である。

そんな風に幼稚舎で柔術をやつてゐたので、本塾の生徒の間にも、一つ柔道をやつて見ようぢやないかといふ議が起つて、何人かの有志者が集つて、之を始める事になつた。その人々を擧げると、その時大人寮に居た今の昭和銀行の頭取生田定之、元代議士であつた福岡の大原義剛、武佐吉、上野勘助、北代達枝(前姓三平)といふやうな名が思ひ出される。童子寮から之に加つた者は、初め私一人位のものであつたでせう。それから河村寛裕、飯塚國三郎といふ方々が仲間入り

をして來た。

何處で柔道を稽古したかといふと、即ち手近かの幼稚舎の道場に割り込んで行つたのである。これが明治二十一、二年頃のことである。幼稚舎は關口流で、こつちは嘉納流といふ有様であつた。先生として迎へたのは山下義韶氏で、當時五段であつたと思ふ。誰が、何ういふ縁故で山下先生を招聘したか、又月謝なども何んな風であつたか、今記憶に残つてゐないが、兎に角吾々も有名な山下先生に教はつた仲間である。

併し柔道部の組織がまだ定まつて居らず、専属の道場も無し、多くの部員もなかつたといふやうな微々たる状態であつたので、山下先生がズット續いて來てゐたか何うか明瞭りと判らないが、其の時分塾生であつた小南英策氏が重に中心となつて、皆を指導してゐた。道場が出來たり、柔道部が設立されたのは、私等が塾を出てからのことである。(談話筆記)

## 四 懐 舊 談

大 原 義 剛

私が塾に入つたのは明治二十一年で、晩學書生であつた。その前年頃から塾生の間に既に講道館柔道の稽古が始まつてゐたと思ふ。二段の南摩綱夫氏が中心で、少し後から初段か二段の小南英策氏も塾に入つて教へるようになつた。その中に山下先生が師範となり、私も稽古を願つたことを記憶してゐる。私は一體九州で關口流をやつたものだから、講道館流に流儀をかへて行くには骨が折れた。稽古する連中は十名足らずの人数で、生田定之、武佐吉なども覚えてゐる。武といふ人は若くて元氣があり、頗る上達のあつた人だが、或時二匹の犬を伴れて獵に行つた際、古井戸に犬が落ちたの

で、綱を持つてゐた自分もついそれに巻き込まれて、犬と共に死んだといふことがあつたので、この人のことは今でも頭に残つてゐる。惜しい人であつた。

その頃塾には年に一回か二回運動會があり、其他種々な體育が行はれてゐたが、柔道の方には和田氏の道場以外、本塾の道場がなかつた。或時福澤先生の宅に伺つたところ、丁度他の先生方も居られたので、これが好い機會だと思ひ、私は先生に向つて、皆から寄附を募つて一つ道場を建て、下さつたら如何でせうかと、演説口調で喋つたことがある。その時部屋に懸かつてあつた額を落したので、大原が亂暴したといふやうな噂が擴まつたこともあつた。此の提案はすぐと實現しなかつたが、その後學生から月十錢位づつ會費を取るようになり、それで道場を學校の方で建て、呉れることになつたと思ふ。私は二十五年七月に塾を出たが、出る迄にはまだ道場が出来てゐなかつた。尤も私は卒業間際の一ヶ年ばかりは選舉運動などに狂奔して、碌に學校へも行かなかつたから、其の點は今はつきり覚えてゐない。(談話筆記)

## 五 記憶を辿りて

河 村 寛 裕

私が塾に入つたのは、明治二十一年の春、當時小南英策、吉田虎太郎、大原義剛、武佐吉、佐藤英太郎、高木利平、佐々木正等の人々が柔道をやつてゐて、私もその仲間に入つた。その時には塾にまだ道場が出来て居らず、夕方から幼稚舎の道場へ押掛けて行つて、講道館流の柔道を稽古してゐた。この連中の大將株は講道館の二段小南氏であつて、皆に教へてゐた。後には青木徹二、平岡良助、柴田美穂の諸氏も仲間に加はつて來た。

さうしてゐる間に、金は何處から出たか、有志者が醵金したか何うか、今能く覚えてゐないが、兎に角塾にも道場が新築されることになつた。これが明治二十四、五年と思ふ。そこで小南氏等が山下義韶先生を招聘する交渉に當り、吾々も初めて正式の師範に就くことになり、其他色々道場内の秩序もそれから出來たのである。今の塾の師範飯塚國三郎氏などが道場に見えたのも、その頃のことと記憶する。その前に來たといふのは、今一寸覚えてゐない。同氏は身體が小さかつたが、力の頗る強い人であつた。又當時芝の豊岡町に平岡氏と同宿してゐた内田良平氏も、時々稽古にやつて來られた。後で濱貞男、平岡良助、青木徹二といふ人々が強くなつた。又丈の小さい人であつたが、背負投の名人に初段の高井龜吉といふ人もゐた。

福澤先生の書かれた『心身之順是柔道』は私も記憶してゐるが、あれは道場の新築祝ひの大會の時に、先生が書いて下さつたのではないかと思つてゐる。(談話筆記)

## 六 塾と私との關係

山 下 義 韶

塾と私との關係は、自分の記憶では明治二十二年から始まつたと思つてゐる。最初南摩綱夫、小南英策、兩氏の勧誘に依り、柔道の教師として行くことになつた。

當時私は、警視廳、學習院、攻玉舎、北辰館等に出て柔道を教へてゐたが、後には此等の關係を止めて、塾の教授支けを専門にすることになつた。

塾の柔道部にも段々と強い者も出るやうになつたので、明治二十五年から等級を設けることとなり、上級を四つの級に分ち、下級を甲乙丙の三つに分けることにした。四級以上には黒帯を許すと共に、その級相當の活法をも授ることにした。それで四級以上の者は、活法を習ふ時に、一度は皆必ず絞められる経験を経なければならなかつた。この活法を組織的に教へるといふことは、私から始まつたのである。

私が就任してから七八年の間は、部員中には頗る猛烈なる勇士も居て、時には亂暴なこともあつたが、師弟間の關係は今日と違つて極めて親密であつて、その間の情味頗る濃やかなものがあつた。

平岡良助、柴田美穂、濱貞男の諸氏が幹部時代と思ふが、或時大會の済んだ後で、慰勞會を三田通りの『いろは』でやつたことがある、七八人の部員が二階に上がつて牛肉を食べてゐた。階下では既に土地の若者等が、何かの會であらうか大勢集まつて餘程酔ひも廻つてゐたやうである。此方は食ふに隨ひ、飲むに隨つて、皆血氣盛りの青年達であるから、大人しからう筈がない。高聲で談する者もあれば、詩吟をする者もあるといふ有様であつた。所が吾々のこの歡興の聲が階下の連中にも響いたと見えて、喧嘩を吹き掛ける積りか何うか、下から一人二人二階に駆け上つて來て、喧しいから静かにしろといふ掛け合ひ。此方はそれで引込むやうな人々ではなかつた。口論が嵩じて來て遂に喧嘩となり、下からどしどし応援隊が押寄せて來て、始末に終へない亂暴狼藉、遂に私も仕方なく『皆やつつけてしまへ!』と火蓋を切つた。この私の聲に應じて、皆腕に覚えの荒業を實地に試みはずこゝぞとばかり、投げるわ、擲ぐるわ、梯子段から突き落すわといふ騒ぎを演じて了つた。その中一人の奴を二階から下の庭へ投げ附けたものもあつた。

そこへ巡査が駆け附けて來たので皆逃げ出したが、高井龜吉氏が搦まへられた。それから双方警察へ呼び出されて大玉を食つたが、併し町内では、豫てからこの若者共の無法なる跋扈に尠なからず苦しめられてゐて、彼等を蛇蝎のやうに思つて居た矢先であつたので、吾々はさういふ惡者を懲らしめしたことになり、向ふは毆られ損、大事に至らずして済んだ

が、それで済まなかつたのは、彼の二階から下の庭へ叩き附けられた者のことである。それが原因で遂に死んだといふので、家族から苦情を持ち込まれ、漸く貳拾圓の涙金を以つて之を解決したことがあつた。

この話が福澤先生の耳に入つたので、サア大變。塾の柔道部員がそんな亂暴をするならば、柔道部などは廢して了へと言つて大いに怒られた。が、又陰では當時の惰弱なる氣風の中に在つて、さういふ蠻男のあつたことを賞めて居られたといふことを後で耳にした。

私は前申す通り、後には塾の柔道部丈を教授することになつたので、塾生殊に柔道部員とは餘程深く接觸してゐたのである。活法教授の時は、福澤先生のお宅を拜借したこともあるが、大抵麻布北新門前町の私の宅で行ふことにしてゐた。又部員諸君の閑暇の折には、皆打伴れて拙宅を訪問されることも數々であつた。さういふ時には、ぼた餅や、鳥飯などを持へて差上げるのだが、運動も元氣であると共に、食ふ方にかけても中々の豪の者が揃つてゐた。

明治三十六年私は米國の鐵道王サミュル・ヒル氏の招聘に應じて、渡米することになつたので、十五年間に亘つた義塾との關係は、殘念にも一時中絶することになつたのだが、今日でも猶時々私の爲に開かれる山下會で、舊部員諸君と顔を合せるのは一つの大なる愉快である。(談話筆記)

## 七一塾生たりし頃

飯塚國三郎

私が塾へ入學したのは、明治二十二年の秋であつた。童子寮にゐたのであるが、その頃塾生の間に既に柔道が行はれて

ゐて、幼稚舎の道場で稽古してゐた。月の会費が確か五錢であつたと思ふ。二段の小南英策氏が指導役で、田島（後の濱口）擔、武佐吉の諸氏は強い方の側であり、大原義剛、吉田虎太郎などの諸氏も上の方であつた。私は河村寛裕、山本（後龜井）久三郎、成瀬正行、小林清一郎といふやうな連中が柔道を始めた時に、一緒にその仲間に加はつたのである。青木徹二氏の這入つて來たのは其の後のことで、内田良平氏の來たのも自分が中途にして塾を止してから後のことである。

塾に一年半ばかりゐてから兵學校豫備校に轉校し、それから私はみつちり講道館で柔道を稽古して、二十六年に初段になつた。その時三田の山へ行つて見たら、新しい道場が建つてゐた。その出來たのは、私の考へでは二十四年ではないかと思つてゐる。その頃芝に居たので、初段になる前に麻布にあつた山下氏の指導する町道場北辰館にも行つて、甲組位の連中を皆投げつけてやつたら、山下氏は自分が一つ對手してやらうと言つて出て來られた。これが私と山下氏との初對面であつた。當時塾の柔道熱心家は、大抵北辰館に行つて稽古を勵んでゐたのである。

其後私は柔道生活に入り、東京、鹿児島、仙臺などの學校で柔道の教授をなし、又福岡でも町道場を開いて、大いに講道館柔道の扶植に努めてゐたが、當時雄心勃勃、恰も日露の間に爆發せる風雲に乗じて、蹶起滿洲に飛び出して了つた。戰歟まつて、東亞の一角に何か一働きせんものと機を覗つてゐたところ、圖らずも熱心なる慶應義塾柔道部諸君の懇請に依つて、遂に同部と深き關係が結ばれ、今日に至つてゐるのである。（談話筆記）

## 八 柔道一夕談

内田良平

私は明治二十五年に東京に出て、暫く芝の豊岡町に居たことがある。塾に入學はしなかつたが、其の當時友人は多く塾

生であつたので、幼稚舎の道場で始めて講道館の柔道を稽古した。幼稚舎にはその頃澁谷といふ先生がゐた。此の幼稚舎の道場は、それよりズット以前に建てられたもので、學校附屬の道場としては日本で最初のものである。そんな風に幼稚舎に道場はあつたが、本塾の方にそれが無かつたので、それで青年塾生は夜間幼稚舎へ行つて稽古したのであるが、二段の小南氏が教へてゐた。學生には吉田、大原、小泉、宮崎といふ人々がゐた。その中に小南氏は誰か先生を雇うたら可いだらうと學校の方に申し出て、山下先生然るべしといふことで、山下先生が最初の師範となつた譯である。その道場につてゐる間に、私は山下先生から講道館へ行つたら好からうと言はれたので、それから小石川の道場へ入門することになつた。その後、塾の方でも柔道が益々盛になり、専屬の道場を建てなければいかぬといふことになり、山上に今一つ道場が出来た。それは明治二十七年と記憶する。何せ二十七年かといふに、私はその年に塾で道場開き大會が行はれるといふので、講道館から他の三人と派遣されたから覚えてゐる。

その時の大會は、そりや非常な盛會であつた。講道館から行つた者は、飯塚國三郎君と私と千葉兵藏君と廣岡勇司君の四名。その對手として組合はされたのは、當時強豪の揃つてゐた警視廳の面々であつた。此の四人の勝負を云へば、最初に出たのが飯塚君、對手は警視廳でも豪の者、飯塚君の袖を取るや否やグツと引き寄せようとした。飯塚君之れ亦素晴らしい腕力家なものぢやから、引かれまいとして身を退いたその勢凄じく、新しい柔道着がその爲めに一尺ばかり裂けて了つた。あの頑丈に出来てゐる柔道着が裂ける位だから、二人共恐ろしい力があつたものだ。この取組は奇麗に飯塚君の勝になつた。次に私の組んだ人は五尺八寸位もある大兵、之に反して私は小兵、丁度親子の取組のやうに滑稽に見えたぢやらう、呼出されて私が立ち上がるや、觀て居る者がドツと笑つた位であつた。が併し、この對手を私はキリ／＼舞ひする程叩き附けてやつた。千葉君は稍々苦戦に陥つた。敵は寝技の上手な人と見えて千葉の腕を逆に取つた。千葉は餘程苦しかつたらうが、腕が折れても降参するなど吾々が言ふものぢやから、何うしても負けられない。涙と鼻水を一緒にながし

て藻搔いてゐたが、とうく之を耐え切つて起き上つた。腕はだらりと下がつてゐた。それを見た敵手は、千葉が參つたものと思つて油斷してゐるところへ、千葉の足拂が電光一閃、サツと敵を投げ飛ばして了つた。千葉も實に偉かつた。講道館から行つた四人の中この三人は勝つたが、最後の廣岡君が警視廳の今井行太郎と引つ組んで、之は負けた。

塾で柔道の盛になつたのは、福澤先生が中心となつてゐられたからである。先生は屢々道場に臨まれて柔道を見もし、又自ら得意の居合術を見せたりした。先生の居合は手を縛つてゐて刀を抜く程旨かつた。そんな風に、武術に了解があり之に達してゐられた福澤先生があつて柔道を獎勵され、又一方には師範に山下先生あり、之れ亦非常な名人であつて、體格が大きいといふ程でなく、眞に巧妙なる技そのものでやるから無理がない。それで學生が稽古して貰ふには非常に都合が好かつた。斯ういふことが三田山上に於ける柔道の興隆を來した所以と思ふ。それで年と共に盛大に赴いて、以前の道場では間に合はなくなり、こんどは綱町に道場を作ることになつたのは、私が塾に招ばれた年で、これは君等が能く知つてゐる通りだ。

前に言つた通り私が柔道の稽古をしたのは、幼稚舎の道場が最初であり、山下先生に言はれて後に講道館へ行つたのだが、その塾の柔道部に後年私が山下氏の後を襲うて聘せられたといふのは面白い關係であるが、又飯塚君とも不思議な因縁に繋がれてゐることがある。

私が十六歳の時福岡に天眞館なるものを建てゝ、若い者を集めて柔術をやつてゐた。十九歳上京の時に郷里の山田六郎といふ先生に後のことを持んで來たが、明治二十七年講道館で初段になり、福岡に歸つて始めて其處に講道館柔道を普及させした。講道館では千葉、飯塚、私が同じ位の力でやつてゐた。千葉君はその時高等師範の教師になつてゐたが、それを福岡に伴つて行き、福岡の柔道を更に盛ならしめた。その中に千葉君は米國行を思ひ立ち、一時郷里の仙臺へ歸へるといふものぢやから、こんどは飯塚君に頼んで來て貰ふことになり、それから福岡の柔道は又一層盛大なものとなつた。福岡

の講道館柔道はそんな順序で進んで來たが、就中飯塚君の力が最も多かつた。その飯塚君が、塾でも亦私の後を引受けて今日の柔道部の師範となつてゐる。其處に不思議な因縁が附いて廻つてゐると思ふ。

昔の講道館の段のことを一寸申せば、段を貰ふといふことは人々難しかつた。それは何故かと言ふに、一方には警視廳があつて天下の巨豪名人を集めてゐた。その中でも一流一派の大家佐村正明、中村半助などいふ世話役は、仁王様のやうな兎ても素晴らしい體格で強かつた。此の人々が警視廳の二級で一番上、世話役と呼ばれた師範格で、三級が助教、之は巡査の服務もする。一級は何時何んな偉い者が出ないとも限らぬといふので空位になつてゐた。ところで、此等に對して講道館の段は何うかといふに、勝負などの時には三段四段が警視廳の二級、初段二段が三級に打附かるやうになつてゐた。その頃西郷四郎氏は五段、横山、山下、富田の三氏は四段であつた。そんな譯で、警視廳に強い者がゐたので、段の昇進は餘程力のある者でなければなれなかつたのである。（談話筆記）

## 九 學生時代の思ひ出

### 加藤直法

小生は明治二十六年九月義塾入學以來専ら剣道部に關係し、入部後間もなく幹事に擧げられ、二十九年四月正科卒業迄其任にあつたので、柔道部の事務には餘り觸れなかつたが、當時麻布北新門前町に後備海軍大尉中川將行氏を館主とし、山下義韶氏を教頭とせる、北辰館と稱する柔道の講習所があり、これが子弟數百人を擁し、頗る隆盛であつて、嘉納氏の講道館と共に帝都に於ける一大道場と併稱せられてゐたものであるが、小生は専ら此處で柔道を學び、義塾柔道部には多

く試合等の場合にのみ出席せるに過ぎなかつた。今の幼稚舎主任小柴三郎氏は、小生と共に北辰館に學んだ一人であるが當時塾の柔道部員にして北辰館に籍を置いた人が多かつたのは、一に山下義韶氏が兩者の師範であつた關係に因るものである。

小生が何故劍道と共に柔道を學ぶに至つたか、又塾生でありながら、何故塾の道場で稽古をせずに北辰館へ行つたかといふと、小生は入塾以前より、劍道の方は既に多少の素養があつたので、塾に來ると直ぐに劍道部に入つたものであるが小生が劍道と共に柔道を志すに至つた動機は、入塾後凡そ一ヶ年のことと思ふが、劍道部大會の開催されたる際、最後の模範試合として根岸乙吉氏（劍道部教師根岸信五郎氏の養嗣子にして助教師たりし人、後に中山博道と稱し劍道の大家）と渡邊鐵藏氏との組合せあり、渡邊氏は柔道にも長じ二段の資格ありて、劍道に於ては根岸氏稍や優りたる所あるにも拘らず、鎧競合等の場合柔道の足掃を應用して、屢次根岸氏を危地に陥れたのを見て憤慨に堪へず、柔道も亦心得置かざる可らずと思つたからである。又劍道部幹事として對等の附合を爲せる、柔道部幹事連の下風に立ちて教を乞ふを屑しとせず、それで窃に北辰館に通ひ始めたのであつた。

明治二十七、八年頃、柔道部の先輩として小生の記憶に残つてゐる人々は、高井龜吉（頗る矮少の人なれども背負投の名人）、平岡良助、濱貞男、柴田美穂、時任靜一等の諸氏であつて、何れも初段級の人々であつたらうと思ふ。併し當時「段」なる稱呼は、獨り講道館にのみ用ひられたるものであるが故に、塾の柔道部にせよ、北辰館にせよ、何れも何級と呼んで居たものである。級と段との實力の關係は、北辰館にありては五級が初段格に該當せしものゝ如く、小生が卒業間際（當時北辰館六級）の塾の柔道部春季大會に於て取組みたる相手は、當時講道館二段の佐竹信四郎氏であつたから、略ぼ其標準が知られると思ふ。

當時柔道部大會の折などの賞品として、木盃、袱紗などに福澤先生の書を表せるものが多かつたが、小生の記憶に残る

一つに『心身之順是柔道』と書いた袱紗があつたと思ふ。

## 一〇 北辰館と塾の柔道

小柴三郎

柔道の道場『北辰館』と云ふても現代の塾生諸君は知らないでせうが、之は今から四、五十年前に、海軍水路大技士中川將行先生が、麻布中の橋向の北新門前町の御自分の邸内にお建になつたのであります。道場の廣さは四、五十坪もあつたかと思はれます。私が其處へ入門したのは日清戦争前のことでした。北辰館は中川先生が御他界後（年は忘れました）閉鎖されましたが、其の當時は中々盛んなものであります。寒稽古の時等は五六十人から七八十人位の出席者があつたやうに思つてゐます。

門人には各學校の學生生徒が多數であります。其の中でも慶應義塾の學生が一番多かつたやうに記憶して居ります。

其の譯は場所も三田に近し、尙塾の柔道師範山下義韶先生が北辰館の教頭であつた爲もありませう。其の當時塾の柔道部の重なる部員は大概北辰館へも入門して居られたやうに思はれます。從て塾の柔道部員も北辰館の門人も、お互に他方の道場へ常に稽古にも行き勝負にも行つたものであります。私も塾の道場へ度々稽古にも勝負にも参りました。塾の柔道大会の時一二度山下先生のお相手をして、起倒流の形を先生が取りで私が受けたこともあります。其の時には福澤先生も道場へ御出でになり、試合や形を御覽遊ばしたものも體氣に記憶に残つて居ります。

斯のやうに北辰館と塾の柔道部とは密接な關係であつて、今は兩人共故人になられましたが、塾の方では濱貞男君、北

辰館の方では池尾武治君が大將で紅白勝負をしたこと等も、四十年前の昔とは思はれぬ程今でもハツキリと眼の前に浮み出るやうな氣持が致します。兩雄共腰業がお得意で、實に鮮なものであります。

其の當時塾から北辰館へ來られた數多い人々の中でも青木徹二君、加藤直法君、大島光四郎君、平野勝次郎君、柴田一能君、金澤冬三郎君、大中圭介君等はよく記憶に残つて居ります。青木君、金澤君、大中君等は私と丁度五角位の相手であつたやうでしたが、加藤君（其の當時は直法サン）とは少し段違ひで、お得意の諸足拂や腰投で、私は稽古の時にボカボカ投げ付けられて居りました。北辰館でも塾の柔道部でも勝負に強くなるより業の冴えることを奨励して居つたやうであります。飯塚國三郎先生には其當時北辰館で稽古をして戴いたこともあります。背負投や腰投で遠慮なく投げ付けられる痛さと、同じ業で相手を投げ付ける極意を懇切に授けられる嬉しさとは未だに忘れることが出来ません。又秋山孝之輔君は北辰館の少年組であつたかと思ひます。ところが不思議な縁で同君とは其後七八年経つてから亞米利加のオベリン大學で一緒に學んだことがあります。久し振で柔道をやつて見たくなり、或日學校のジムネージュムへ二人で出掛けて、器械體操で使ふマットを幾枚も敷き並べて、稽古をしたことがあります。渡米前には同君に稽古を付けたこともあつたので其の氣が失せず、自由になるものと思つて掛つた處が、豈圖らんや、一本も取れず、自由自在に引き廻はされて、ボカボカ勝手次第の業で投げ付けられて、後で二日も三日も身體が痛んで堪らなかつたのには、我ながら老朽の悲哀を感じざるを得ませんでした。

私は山下先生には北辰館時代にも特別にお世話になつたばかりでなく、先生が米國に御滞在中にもお世話になり、又先生の御推薦で二十五六年前に塾に奉職するやうになつたのであります。

北辰館と塾の柔道に就て詰らぬことを述べ立てましたが、山下先生を初め斯道の先輩、同輩、後輩諸氏の御健康と御幸福を祈つて四十年昔の思ひ出の結といたします。（昭和八・二・一一日）

## —三十五年前在塾當時の道場

須 藤 久 藏

明治聖代二十七年當時の塾の道場は、四十疊足らずの小さなものであつた。併し其時代に於ける學校の道場としては、立派な者と言へやう。所謂三田の道場として天下に振つたものである。先輩柴田美穂君、平岡良助君、濱貞男君等の剛の者を首とし、青木徹二君、田村茂兵衛君、石渡通君、平野勝次郎君、山本魯一君等の面々が、頑張つて居つたのである。

當時の師範山下義韶先生は、少壯にして早くも一家をなし、已に斯界に重きをなして居た。體は鐵の如く、勇氣漂々たるものであつたと記憶する。例へば先生は單に道場のみでなく、陸上競技に於ても、袴の縫をとつてランニングをする時、杯の颯爽振りは、いつも職員先輩競争の覇者であつた。當時塾の運動部としては、外に剣道部、端艇部、野球部はあつたと思ふが、最眞目かは知らぬが、柔道部が一番旺盛な羽振を持つて居つたのはなからうか。

二十九年頃は福澤先生も毎晩、令孫中村壯吉君を連れ、稽古を見に来られた。壯吉君の令兄愛作君は、當時幼稚舎生で十三四歳であつたと思ふ。幼稚舎には別に道場が設へてあつて、此時分には本塾からは數名の者に私なども加はつて、稽古をつけに行つたのであるが、須田卓二君、佐野甚之助君、中村愛作君、平野重三君、向山昌治君等のしたゝか者が居つた。そうして吾々大人の道場に時々日を定めて稽古に来て、山下先生の門下となつて居つたやうに記憶する。大人が此幼稚舎生を相手にしても、一本取るには餘程の無理をせねばならぬやうであつた。詰まり馬力の競争で美少年を組み伏せたのだ。後には是等の一派が中心になつて塾の道場の大黒柱を形ち造つたと言ふことになつたが、それは明治三十五六年頃

のエポック時代であらう。

明治三十年頃は吾々が漸く巣立つて、部員として稍認められ、自分も唯の一晩も缺かさず、稽古に親しんだと言ふ時代で、入部した當時の先輩平岡氏、柴田氏、及び其他の諸先輩既に去り、濱氏を筆頭に青木氏、平野氏、加藤直法氏、大島光四郎氏、櫻井三治氏、麻生誠之氏、西澤正敏氏、多賀武次郎氏、柴田一能氏、山口操氏、増倉啓次郎氏、諸遊慎吉氏、長谷川寅八氏、等の諸氏が、何れも熱心に技を練つた時代だと思ふが、此時代に福澤先生御揮毫の心身之順是柔道なる染抜きの袱紗が、一度大會の勝者に與へられたと思ふ。斯く言ふ私も勝者の驥尾に附して光榮に浴し、記念品を頂戴して紅顔得意の時代を演じたのである。對手は山下先生の町道場とも言ふべき、北辰館の剛の者であつた。北辰館は麻布仲の橋向ふの北新門前町であつたらう。先生の住宅の附近と記憶する。

此頃先生のところには、九州から斯道研究の爲めに來られた生田君が居つて、塾の道場にも先生と一緒に毎晩來られたが、左ぎつちよの鐵骨造りの剛の者、隨分先輩をなやました。鐵骨造を思ふときに柴田一能君を思ひ出す。同君ときたら是も同構造の持主で仲々の頑張家、手におへぬ一人であつたと記憶する。又忘れられぬのは平野勝次郎君だ。體軀が軽くて彈力あり、押へようのない對手で閉口した。紅白勝負に平野君が紅組の大將、不肖私が白の大將で、一度仕合つたことがあるが、遂に右の調子で絞を喰ひ、敗れたことを今によく記憶する。

二十九年から三十一年の暮にかけて加藤、大島、麻生、櫻井、神林、増倉、多賀君等の面々は塾を出た。殘るは濱、平野、柴田君等の勇者を首とし、諸遊君、福澤三八君、倉田敬三君、島津理左衛門君、金澤冬三郎君、堀切善兵衛君、及び時々やつて来る松原良三君、廣岡君、國君、鹽崎君と言つた諸剛の時代である。就中諸遊君は最も熱心家であつた。蓋し同君の得意の時分であつたらう。他の學校道場から招待せらるゝ場合は、いつも矢張剛の一人諸遊君が出場して、能く塾の名を耻かしめぬ成績を得た。私は克く諸遊君のお伴をして、應援の役目を努めたものだ。そうして同君の都合の悪い時

には、自ら奮發して代りに出て勝つたと云ふこともあり、聊か得意の時代があつたことを思ひ出すると、何と云ふても一生の中で斯ういふ時代がお互に眞の得意時代で、洋々たる感が胸に溢れるものがあつた。そうして此氣分が亦一生の元氣を養成しつゝあつたことを回顧して已まぬのであります。

今日の塾の道場は、全く面目を一新して居り、所謂多士濟々で、何十段かの剛勇其者を以て充満し、何れを看ても敬服する部員諸君のみであるが、私の在部當時の初め明治二十八年頃を回顧すると、洵に感慨無量である。入部の動機は濱、平岡、柴田などの諸先輩が、私の居つた童子寮に集まるに、如何にも四隣を威壓すと云ふ風があつて羨ましい。殊に濱君は當時塾中の秀才で、學術品行及び優りて一種の感を與へたのは、蓋し少年の僕一人にではあるまい。隨て誰が勧誘するのでもなく全く思ひの運動に向つて自由であつたが、私は柔道部に這入りたくつてならなかつた。

當時の先輩、剛の者も悉く無段者であれば、全部員中誰一人段を以て誇る者なく、柔道を以て友人の間に鼻を高くし、肩で風を切つた者もなかつた。所謂『心身之順是柔道』の空氣が道場に満ち、その眞意徹底が我が柔道部の特色であつたらうと思ふ。

## 一一 本塾柔道部の今昔

柴 田 一 能

上

昭和八年癸酉の年二月三日は恩師福澤先生の第三十三回の忌日で、明治三十四年の三月大學文學部の業を卒へてから三十三年となり、米國三箇年の留學から歸つて聊か師恩報謝の心持から教員の數に加はり、爾來丁度三十年目に入つたので

ある。明治廿九年の一月、日清戦役の功で思掛けなく勳八等白色桐葉章と終身年金とを下賜せられたので、之を學資として、豫てよりあこがれてゐた福澤先生の塾に入ることゝなつたのである。

一能の中等教育は當時東京で三つのミツシヨン・スクールの一に數へられてゐた芝白金の明治學院で受けたので、一時天下に名を馳せたヘボン博士が辭書を出版して得た利益を學院に寄附してヘボン館と名づけた新式の寄宿舎を建て、其地下室の一隅に柔道の道場が設けられ、數十名の學院生徒が、掛聲男ましく放課後に稽古をしてゐるのを見て、垂涎三尺、直ぐにも入部して心身を鍛錬したいと熱望したが、何分一日六時間づゝの勞働に從事して衣食の資を稼ぎ出さねばならぬ苦學生活をやつてゐたので、毎日學校の歸りに三分五分の時間を惜しみつゝ、地下室のガラス窓から羨ましさうに他人の稽古振をながめてゐたのである。

明治廿六年十二月一日、徵兵適齡、甲種合格で麻布の歩兵第一聯隊に入營の身となり、續て明治廿七八八年日清の戦争となり、現役のパリ／＼で従軍することゝなり、清國花園河口上陸以來五回の戰闘に參加し、廿八年一月十日蓋平城外の激戦で、右腹部に貫通銃創を受け、丁度半歳の病院生活を餘儀なくされ、全治退院後、麻布の元隊に復歸して一生懸命服務中、入營満二箇年に當る同じ年の十一月三十日附で歸休を命ぜられ、三年が二年で済んだのみならず、年金までも頂戴したので、翌廿九年の一月八日塾の開校を待ち受けて編入試験を受けて三等の二に編入されることゝなつた。

六年以來寝ても覺めても忘れる間もなかつた柔道部へ正々堂々大手を振つて入部した時の得意さは今思ひ出しても心臓の高鳴りを覺へる程である。我柔道部の起源を明治廿年とすれば丁度拾年目に當り、漸く部としての創立期の半途に達した頃であつた。道場は建坪三十坪位で、舊演説館の裏手（現在本館の北裏）に在り、柔劍兩道を兼ねた道場で、疊の上げ卸しで時々剣道部と衝突することもあつた。四十餘年勤續になつた故濱野定四郎先生が健か兩部の部長を兼て居られ、先生自身も時に竹刀を振つて稽古に出られたように覺へてゐる。

師範は山下義韶氏で助手に生田さんと云ふ小作りな而も金錢のやうに固まつたガツチリ其ものと謂ふべき先生があつたが其後杳として消息を聞かない。當時の最高段者は法科本科生の濱貞男君が二段、平野、大島君等が初段で、初段になれば鬼の首でも取つた以上に思はれたゞけ容易には黒帯はじめられず、其代り實力は今日の段以上であつたかと思はれる。我々柔道部員の出入する道場の外に、古くから幼稚舎に附屬の道場があつて、有級者は一週間交代で幼稚舎生の稽古をつけに通つてゐたこともあつた。

小石川富坂の講道館道場は固より嘉納流の本山であるが、平素から最も親密に交際してゐたのは師範の關係からでもあらうが北辰館道場であつて、塾員加藤直法君や小柴三郎教授などは北辰館出身の錚々たるもので、盛んに投げつけられたものである。

何分兵隊上りで、年も取つて居り、蠻勇と腕力を肆にした爲めに人一倍痛い目にあはされた。業毎に力を抜け力を抜けと注意を受けたが、性來の負けじ根性で、ナニこんなチビに負けるものかとツイ蠻力が出てしまつたのである。紫組の少年で向山昌治君の軽妙な稽古振は今でも目前にチラついてゐる。

## 下

元來塾そのものゝ特色が家庭的であるのは天下周知の事實であるが、その一部たる我柔道部の特色も亦慥かに家族的であり家庭的であつた。當時山下師範は麻布北新門前町二番地に住んで居られ、塾から餘り遠くもないのに、一般部員、就中我々幹事連は學校の歸りや、稽古の崩れに必ず師範の宅に押しかけて、晩飯の御馳走になり、時には人頭税の割付で鳥飯會を催すことも度々であつた。

秋山家から嫁づかれた筆子夫人が、日蓮宗の家から出られた關係上、自分と山下家の間には柔道以上に精神的の因縁が結ばれ、遂に山下師範一生一代の大事業として海外殊に米國に講道館柔道を弘め、聊か嘉納師範に對する師恩報謝の一端

に供したいとの宿望さへ打ちあけられる間柄となり、「人生知己に感ず」と古人も言つたやうに、自分も深く先生夫婦の信頼に感激し、必ず近き将来に先生の大望を成就させねばならぬと心に誓ひ、明治三十四年二月三日福澤先生の逝去に遭ひ、越へて三月無事大學部に業を卒へると共に、日蓮宗海外留學生として渡米し、エール大學入學と共に眼を張り耳を聾て、其チャンスを狙つてゐたのである。

『待てば海路の日和かな』の諺に洩れず、留學二年の秋鐵道王ヒル氏の令息に日本の武士道教育を施したき由にて、沙港日本人會長古谷政次郎氏を介して自分に照會のあつたのを幸ひ、遙ニ無ニ、山下師範夫婦を推舉して數次の交渉を重ねし後、明治三十六年の暮、芽出度渡米の目的を達せられることとなつたのである。

先生出發の前、我部師範就任十五周年の記念會を催し、當時贈呈した記念品も現存してゐる所から推して我部の創立は明治二十年頃と斷定してよいかと思はれる。先生舊冬大患に罹り、帝大病院入院後面會謝絶の重態で、一時は絶望かと思はれたにも不拘、間もなく全治退院、更に餘生を斯道發展の爲に捧げ、新たに水道橋畔に敷地を選定せる大講道館の完成を見るまでは断じて瞑せずとの大磐石のやうな固い決意は、聽くからに満身に武者振りを感じざるを得ない概がある。先生正に六十有九歳、古稀の壽を迎ふるも早や明年、斯く申す自分と雖も今正に還暦華壽に達したのではあるが、老師は八十の高齢に接して矍鑠壯者を凌ぐ元氣を見ては、まだゝ弱音は吹けず、況んや第五代目の部長として十三年を數へながら、何等の爲す所もない今日、責めて寒稽古位はと勵んで、努めて若返りつゝ、現飯塚、中野呻師範と共に部運の將來に奉仕したいと願つてゐる次第である。

在塾五箇年學生々活の間に豫備役召集の三週間を除いて、山上の道場に姿を見せなかつた日は唯の一日もなかつた程、我道場は自分の今日を爲すに至つた身心鍛錬の菩提樹下であつた。柔道部の一員とし乃至幹事の一人として五年間何事を爲したかは、善惡共に偽りなき部史の事實が證明するであらう、嗚呼。（昭和八年二月）

### 一三 興隆時代の曙光を語る

佐野甚之助

三田山上で講道館流の柔道が、學生の間に稽古され出したのは、先輩の話に據ると、今から四十六年前の明治二十年である。當時は塾生の中で有志が集まり、今の圖書館の邊にあつた幼稚舎の道場を利用して稽古を始めたのである。斯道に於て一日の長ある者が指導者となり幹部となつて、會員に教へてゐたといふ。明治二十二年に山下師範を招聘し、二十五年に體育會の一部になつて、部長には大先輩の濱野定四郎先生が据はり、こゝに始めて完全なる柔道部の形態が具はり今日の基礎が成り立つたのである。

私が始めて塾の幼稚舎に這入つたのは、それより數年後の明治二十九年一月である。明治九年以來關口流の柔術が、生徒の間に修業されてゐたといふ幼稚舎は、其の時舍長も柔術の先生も既に代が替つてゐて、坂田舍長の下に澁谷といふ老先生が、淺黃色の稽古衣を着た二三十名位の少年生に、鐘巻流の柔術を教授してゐた時代である。別段に入會を勧められたこともないので、其修業者等は特別な團體のやうに思はれて、田舎出の私は珍らしさに時々道場を覗いて見てゐた位に過ぎなかつた。

それから間もなくこの古流の柔術が廢され、幼稚舎にもいよいよ新しい講道館の柔道が採用され、之を生徒に習はせることになつたので、寄宿舎にゐた大部分の者は皆喜び勇んで其の仲間に加はつた。先生は即ち本塾の師範たる山下先生で、其他塾の有級者の連中が四五人づつ交替で毎晩教へに來て呉れた。柔道をやると斯んなにまで筋肉が發達すると、山

下先生が自分の筋骨隆々たる腕や腿に觸らしたことなども覚えてゐるが、それは今から三十七八年も昔のことである。

この本塾から幼稚舎に教へに來て呉れた人々は、其の頃柔道部で鳴らしてゐた有級者の全部であつたと思ふが、中でも大島光四郎、平野勝次郎、久保勝之進、増倉啓次郎、麻生誠之、山本魯一、須藤久藏、神林光正、櫻井三治、柴田一能、末永顯橘の諸氏が憶ひ出される。又塾生ではないが、山下先生の宅に寄食して、柔道を專修してゐた福岡の生田といふ人も毎晩顔を見せてゐたが、此の人はゴツくした頑張り屋、ちつとも轉んで呉れないといふので、幼少な生徒等は稽古を避ける風があつた。教へに來られる人々も樂ではなかつたらう、小さな者を相手に稽古してゐると、腰が痛くなるところにてゐるのを耳にしたこともある。晩の八時頃までに稽古が済むと、先生方に茶菓を差上げるのを例としてゐたが、之は幼稚舎として、師範及び其の助手たる有級者の勞を犒ふ僅かばかりの報いに過ぎなかつた。

その中にだん／＼と稽古にも慣れて來、技も上達したので、幼稚舎生支けの月次勝負や紅白勝負なども始まつた。勝てば勝つたで面白くなり、負くれば負けたで勵まされ、遂に幼稚舎生と雖も侮り難い一團體にまで仕上げられた。仲間の中では、須田卓一、清水(後の正野)伊勢吉、丸山儀一、守川玉三郎といふやうな連中が強い方であつて、後の興隆時代を築き上げた中村愛作氏、或は黄金時代四天王の一人なる平賀恒次郎氏などは、當時まだ道場の隅っこで騒いでゐるのが面白といふ時代であつた。此の二人の如きは、幼時特別に人に優れた體力の持主でもなかつたが、後に本塾に移つてから其の身軀の偉大なる點に於て、其の技術の精銳なる點に於て、漸次衆を凌ぐに至つたのは、全く熱心なる平生の稽古の賜ものであつて、寒稽古暑中稽古の精勤と共に、ぐん／＼伸びて行つた結果であつた。

明治三十一年に學制改革があり、幼稚舎の中等科は廢せられ、上級の者は皆本塾の普通部に轉學させられることになりこれで本塾の柔道部は、遽かに一勢力を加へることになつた。前に記した須田、清水、丸山、守川の諸氏は、その頃又はその後間もなく學校を止めて、長く三田の山に留まつてゐなかつたが、體技共に優れた中村愛作君を始めとして、小泉浩

平野重三、向山昌治、平賀恒次郎の諸君は、幼稚舎出身として名を辱かしめなかつたばかりでなく、其後本塾先輩の衣鉢を襲いで、柔道部を背負うて立つに至つた。

私等が本塾に合併された頃の柔道部の面々を憶ふと、次から次と色々な顔が胸に浮んで来るが、名前は多く忘れた。その頃道場で目立つてゐたのは、前にも云つた濱、大島、平野、須藤、末永、神林の諸氏であつた。昔は有級者であつても皆黒帯を太く結んでその武者振り勇ましく、若き者の憧憬の的であつた。濱氏丈けは當時二段といふ一人飛び離れた先生格であつたが、卒業間際に病魔の侵す所となり、一二年静養の後天壽を全うせずに夭折して了つた。大島氏や須藤氏は、體格も立派であり、すらりと立つた無理のない稽古であつた。此等の人々の勝負の時は、その足の運び又は手捌き具合ひが他の人と異つてゐて、眼をつぶつてゐても其人の特色が音で判る位であつた。神林氏は長身の體格、後のジラフと綽名された堀切君よりも、尚背の高いと思はれた人であつた。平野(勝)氏の負けず嫌ひは有名なもので、送足拂を得意としてゐたが、勝負などの場合に相手を投げて、それが八分位の業ありに過ぎない時であつても、審判者の顔を眺めて、一本の掛け聲を催促するやうな態度をする人であつた。その頃寒稽古に鐵メタルを皆勤の賞として出すのを例としてゐたが、幹事たる平野氏が皆勤した場合には、それが金メタルに變るといふ様な、專横振りを發揮した無邪氣な快男子でもあつた。末永氏は、丁度の中野榮三郎君のやうな體軀の人で、強くもあり、親切な人でもあつた。忍達は最も多くの人に稽古を願つたと記憶するが、明治三十二年の春惜も此の世の人でなくなつた。

此等の人々の後を承けて（と云つても、一の時代の末と次の時代の初めとは、相交錯してゐて、その間に截然たる區別がない）柔道部に重きをなしてゐた者は、柴田一能氏であり、諸遊慎吉氏であり、堀切善兵衛氏であり、島津理左衛門氏であつた。倉田敬三氏も此の時代の人で、田中信藏氏もその末葉に屬する。私は此等の諸氏と能く稽古もし、又試合に於て鎧を削つたこともあつた。諸氏は頗る熱心な人々であつて、田中君を除き皆一度は幹事の任に就

き、能く後進の面倒を見て呉れた。中でも諸遊君の如きは熱狂に近い程の柔道熱心家で、その得意とした背負投の話をさせると、一日でも喋つてゐるといふ人である。諸氏こそ前の時代よりの傳統的柔道部の精神を受け継ぎ、之を磨き、之を三田山上に發揮して、今日の柔道部の礎石を固からしめたものと、私は思つてゐる。私は家庭上の都合で普通部卒業の時一年遅れ、それで島津君等と机を並べることとなつたが、畏友島津君は學業の中途にして早く此の世を去り、田中君も亦社會の人となつてから黄泉の客となつた。其他の諸氏は今人生の働き盛り、社會的に夫れゝ活動してゐる。

當時の塾生の風態と云へば、混然雜然として頗る亂雑を極めたものであつた。一方には縞の衣物に角帶があるかと思へば、他方にはハイカラな洋服姿あり、又一方には白縮緬の太帶をだらりと結んで、それに金時計をぶら下げる若旦那風の學生あれば、他方には吾こそは薩摩隼人の末孫なりと云はねばかりに、短褐敝袴、目を張り肩を怒らし、大道狹しと闊歩する蠻カラもあつた。或は紅燈綠酒の間に淺酌低唱する軟派もあれば、市井の無賴漢と鬪つて以つて快哉を叫ぶ硬派もあつた。その間に在りて前記の諸氏は、學生とはそんなものではない、と口にこそ言はぬが、質實剛健、満々たる弱氣を素朴なる身装に包んで、辛酸學業を勵み、刻苦柔道に精勤し、時には奮起壇上に立つて獅子吼し、その侃諤の辯は能く三田山上の警鐘ともなつたりした。

其後の時代に於て、吾々は中村愛作、小泉浩、福田龍、秋山孝之輔、本多親宗、山田又司、平賀恒次郎及び大塚莊亮等一騎當千の諸士の出現を見る。(私も亦この初期に屬する。)若し此れ迄の時代の中明治二十五六年迄を、我が柔道部の搖籃時代と云ひ、それより三十年頃迄を創成時代と云ひ得べくんば、其後の十年間を興隆時代と稱しても好からうと思ふ幾多の理由がある。此の興隆時代に入る前後から、部員は續々と講道館に入門し、又此の時代に入つて始めて對校試合をも行ふに至つた。而して此の時代の柔道部をして斯界に重きをなさしめ、その勢力を更に大ならしめたものは、明治三十二年に大中圭介氏、三十三年に吉武吉雄氏の如き大物の入學したことであり、又三十五年には藤崎(後の箱田)達磨、高橋

正、及び五月女(後の湯本)芳三郎諸氏の如き強雄相踵いで部員に加はつたことである。こゝに至つて東都の南丘に一城を構へたる三田軍は、此等の名將勇士を得て陣容漸く整つたと謂ふべく、其年京都に遠征し、關西の重鎮三高と戰ひ、不幸にして一敗地に塗れたが、併し之は戦に勝つて審判に負けたといふ奮闘振りであり、又同年とその翌年には、二回とも早稻田軍を三田山上に邀へ撃ち、遂に斯界に巨豪の名を成すに至つたのである。

これで三田山上時代が了るのであるが、當時の三田評論(明治三十五年十二月發行)に誰の感想であるか、斯んなことが載つてゐる。

『先輩の茶話によれば、今より七八年前の昔は我が柔道部の最も盛なる時代にして、有段者のみにて三四名の多きに達し、有級者亦之に準じ、爲めに一時三田市民の心膽を寒からしめたりと。余の人塾せしは二十九年初冬なりしが、當時は最早其面影だもなく、有級者は僅に十指を以つて數ふべく、實に寂々寞々たるものなりき。星移り物換り、一盛一衰は固より免れざりしと雖も、漸次隆盛の域に進み、昨年今年の兩年間に長足の進歩を來たし、有段者のみにても十名の多數となり、有級者の如きに至りては五十名を以て數ふべし。斯の如く盛なるは、七八年の昔は愚か、東都幾十の學校亦顏色なかるべし。見よ今や時流沿々として墮落腐敗に陥り、優柔纖弱意氣銷沈せるの時に際して、獨り三田三千の健兒のみ嚴然として東都の一方に雄飛せる豈快ならずや。』

この感想は大體に於て當つてゐるのであるが、併し明治二十九年頃の柔道部を評して、『最早昔日の面影だもなく、實に寂々寞々たるものなりき』と言ひ去つてゐるのは、唯その表面に現はれた所丈けを見ての感想に止まつてゐると思ふ。その寂寞は、柔道其のものの萎靡不振ではなくして、實は多年柔道部に在りて名を成した幾多先達の士を社會に送り出した後の一時的沈靜時代であつて、其の裏面を見れば、後に残れる幹事其他有力なる部員の柔道部振興に向つて拂つた苦心努力は、却つて最も多とすべきものがあつた。さればこそ其の苦心の功空しからず、二三年ならずして興隆時代の曙光を見

るに至り、五六年にして『その盛なるは、七八年の昔は愚か、東都幾十の學校亦顔色なかるべし』と言はれるまでになつたのである。

明治三十七年に入つて、新に内田良平先生を師範に迎へ、道場を綱町グラウンドに新築し、斯くて我が柔道部は、新規模の下に益々發展の道程を辿り、明治三十九年飯塚先生の師範就任と共に、更に進んで天下に霸を唱へ、黄金時代を現出するのであるが、之は次の吉武君の話に譲ることにする。

## 一四 明治三十三年以後の回顧

吉 武 吉 雄

僕が三田の道場に足を入れたのは明治三十三年の十月で、夫れ迄は郷里久留米にて八歳の頃から剣道をやつて居つたので、三十三年春普通部三年に入學した直後は、同じ道場でも剣道の方をやつて、當時の部員の一二人を除いては、皆に打勝つて居つた。僕は元來肥満性でデブデブであつたが、剣道の先生は比較的薄肉で、柔道の先生は殆んど皆が岩の如き體格であるのを見て、肥満性の自分の體育は柔道の方がよいと考へ、第二學期の中頃より宗旨替へをして柔道部に入つた。最初の日は、當時二級の倉田敬三氏に稽古して貰つた。倉田先輩は温顔寛容の人であつたので、ヨサソウな人と思つてブツ附かつた。二本投げられた。尤も僕も郷里で野次的に少しばやつて居つたので、受身と大腰位は出来た。次に三級の中村愛作君に願つたが、一本もやられずガンバリ通した。ソコデ心中興し易しと考へた。時に當時の先生山下九段（當時六段）が、アレとやつて見よと云はれたので、幼年組の三級であつた平野重三氏とやつた。彼は白面小兵なれども、年は

二十歳位であつた。何コンナノがと思つて居ると、背負投でやられ、又體落しでやられ、更に二度目三度目の背負でやられた。山下さんはニコリノ笑つて居られた。大に驚いた。それから平野君とは毎日毎日、時によると日に三度位やつて同君に勝つ様になつたのは一年後であつた。當時は東京各學校共初段が一二名位で、二三段の人が居る學校は殆んどなかつた。塾も諸遊君と田中エンマ君（故信藏君）が初段で、現部長柴田さんが弱い一級で、故島津理左衛門君、天狗事大中圭介君、佐野甚之助君、倉田敬三君、小寺源吾君、金澤冬三郎君、故吉堀誠一君、堀切善兵衛君等が一二三級當りの猛者であつた。

三十五年の春箱田達磨君が初段で入塾した。又故高橋シャモ君（正君）が初段で入塾した。中村愛作君佐野君が強くなる等、塾の柔道部も堂々たる陣容が整つたので、京都三高に戦を挑んだ所快諾して來た。之れが日本に於ける柔道遠征の最初である。僕も二級で中堅に据へられ、四人投げて五人目にやられた。然し投げ業も投げられた業も、良く判断が出来ぬ位夢中で、唯「何クソ」一天張りでやつた。塾は三高に負けたのが非常の刺戟となつて、急に強くなつた。（尤も敗戦後は當時の選手は皆稽古着の襟の裏に「三高」との戦では紅軍だつたので、紅布を縫ひ付けて選手同志毎日稽古した。）箱田君の外明治三十五年に中村、佐野兩君が初段に進み、更に湯本君（當時五月女君）が初段で入塾、僕等が實力一段位と自信した一級で、非常に強くなり、三高は二度目には引受けくれなかつた。それから早稻田と對校試合をやり大勝した。三十六年正月に僕が（普通部五年）初段に進み、塾の初段は箱田、中村、佐野、湯本、吉武の五人があつたが、皆第一流の初段であつた。大會等には必ず當時一流の猛者を招待し、時によつては二段を招待し、之と試合して負けた人は殆んどなかつた。早稻田と二度目の對校試合にも勝つた。それから二段三段と強い人が段々出來たが、三十八年には中村三段佐野一段濱田初段（故精藏君）の大物が卒業せられ、箱田、湯本兩君と僕とが強味の中心となり、當時大分強味の出た平賀恒次郎、福田龍、中野榮三郎、石渡泰三郎、故塚本太作の四君を猛烈且つ熱心に練り上げた。四十年頃福田君は渡米したが、他の

四人は講道館に於ても慶應の四天王として大に恐れられた。

四十年秋には東京帝國大學に試合を申込んだ。彼は當時四段の杉村陽太郎君（現在國際聯盟事務次長、當時二十三貫五尺九寸位の大兵で、實際強かつた。殊に殘念ながら中村愛作、箱田達磨、僕の三人共、同君には初段當時皆一度敗を取つた。）を大將とし、福永吉雄、新井源水の兩四段、澤、山上等の三段連にて、僕は三段の湯本君を大將に三段の僕が副將二段の中野、平賀、山田、塚本、石渡、大塚君等、實力充實せる各二十名宛の選手を以て、佐村八段（當時五段）及び嘉納先生審判の下に帝大道場で大對抗戦をやつた。この對戦は最後に大將同志の戦となり塾が負けたが、これは實に私學官學を代表する兩大學の戦で、高段者の揃つた事に於ても當時空前の大對校戦であり、其試合振は正々堂々たる模範的の試合で、而も殺氣を帶びた程の激戦、當時天下の話題となつた。それから又平賀、中野、石渡、塚本の四天王はグン／＼強くなつて、帝大は次第度の戦を避けた。僕は四十一年春此の勝負を最後に湯本（四段）、山田（三段）、盛田、近藤、上杉、柳井（二段）の諸君と共に義塾五十年祭の年に卒業した。卒業後は横濱に就職したので、道場には日曜毎に来て、相變らず世話をしたし、前記四天王の四君の外、古川甚一、堺泰吉、谷岡謙、故早川章次郎、瀬良是助、小野秀一、作川信二郎、鈴木鐵太郎君等がメキメキ強くなるのを見ると、實に愉快であつた。

明治三十年頃僕の郷里の九州は、未だ野蠻に近い程亂暴であつて、武術をやつたり運動をやる者は、ワザト破衣短袴をつけて、冷酒を鯨飲し、徒に大言壯語し、直に直接行動に出で、而も其出足の早きを以て尊しとした。從て其所に常識と品性に缺くる處があつたのは當然で、又強い者程勉強もしなかつた。今にして考ふれば、無邪氣な不良であつた。其空氣の中に育ち、而も相當深淵にはいつて居つた僕は、三田に來て剣道部に入部した時は、部員の稽古振が軟弱でいやに老人振つて居つて、元氣がないのに失望した。勝負をしても一寸少し當ると、即ち眞剣仕合であれば皮下二三分位しか切れない程度の當りでも、大袈裟に切り上げて大見得を切ると云ふ風であつたから、僕は當つたかも知れぬが、少しも痛くない

から参らぬと主張して、そんな時はドンドン體當りで突倒し、立上る處をキナ臭い位打つたが、當時の師範根岸信五郎翁は、吾輩の主張を是認して居られた。部員は何となく元氣がなく、袴も付けずにぶらりと来て、貧弱な打合をして歸るのを見て、僕は慶應義塾の學生は、剣道部でさへ此通りだから總てデレ助揃だと考へて一層失望した。

然るに柔道部に鞍替して見ると、同じ着流しの連中ではあるが、何だか親しみがあり、大學生が普通部生を指導するにも、親切と主義がある様で、而も普通部一年位の茶目達が、當時大學生で幹事の諸遊君や現三田柔友會長の金澤冬三郎君（當時心細い天神鬚を生して居つた）等をとらへて、ヤイ天神とかヤイ章魚さんだとか、まるで本名を呼ばないで、ニツクネーム（尤も塾生には一般にニツクネームが流行する事は古今を通じて同じである。柔道部では殊に多かつた）の呼捨てであつたが、扱てこの章魚であり、天神である先輩が指揮命令すると、講道館とか其他一流の道場に於ける如く四角張つてハツとかしこまりはせぬが、チヤンと同一方向に向つて進んで行く。其の當時今の大幼稚舎に下る坂の右上に學生のクラブがあり、入浴隨意の湯があつて、クラブには七十歳位の老嫗と、最後には義塾の學生取締に迄出世した「諸君烏合の衆よ」と云ふ珍句を、普通部生徒隊の指揮官として平氣で述べて有名になつた有泉義理作曹長の妻君とが居つて、木村屋のパンを商つて居つたが、當時の稽古は夜であつたので（道場は山上にあつて一つ所で晝は剣道部が使つて居つた）、稽古が済むと高段者も、紫帶も、論客の大學生も、茶目の白帶も、アンパンの食競争や、堅パンの早食い研究や、ザル碁の練習をしながら、毎夜大騒をして別れるが、其間僕等の目にも、彼の男は少し下等だな、彼の男は利己主義だな、彼の男は天狗になつて居るなど思れた連中には、先輩や同輩が談笑の間に自然と自覺する様に仕向けて行くし、陰で良くない事をして居る様な噂がある者は、ドンドン道場で投飛ばしては又クラブで手なづけて、道場を忘れぬ様に仕向けて行く。學術の方が何うもマヅイ人には、野次りながらも何人かがチヤンと寄宿なり下宿へ教へに行く。而して皆が、柔道部の者は外の者とは別であるぞ大にエライのだ、少なくとも柔道部の者はそんな事はせぬのだと云ふ風に、自尊自重せしめて居る様で、而も

稽古も元氣で、強さも強いと云ふ風であつた。

當時は田舎者の僕にはハツキリしなかつたが、之れは故青木徹一氏等の時代よりの傳統でもあつたらうが、金澤冬三郎君、堀切善兵衛君、柴田一能君、中村愛作君、佐野甚之助君、故島津理左衛門君等の様な先輩が、常に福澤先生に接近して先生に感化されて、學生は強くなければならぬ、正しくなければならぬ、進取的でなければならぬ、而して何事にも熱がなければならぬ、常にファイティング・スピリットに満ちて尙且つ中庸を得て居らねばならぬ、之と共に武を練り、武士的精神と強健なる身體を維持し、常に健全なる精神に満ちて居らねばならぬと云ふ先生の教へに共鳴し、明治三十年頃一時義塾々生の風儀が大分軟化したのに奮起して、先生の所謂天下の先導者を以て任ずる慶應義塾、其義塾の中心は、吾々柔道部が背負て立つのだと云ふ、傳來の大精神を發揮し、之れが指導精神となり、而して圓滿なる塾風によりて此精神此目的が和氣藪々の裡に育成されて居つたのであつた。九州に育つた田舎者の僕も、理屈なしに何時の間にか之れに感化され更に自覺した後は、斯くの如く人を導いて行かねばならぬと信じて努力した。當時の事を回顧すると、三田に來て柔道部に入部した事が、僕の一生に取つて一番意義ある事であつた。

當時の先輩は偉かつた。幹部の中心人物は、自から自制自重して部員を導き、今日の柔道部の大精神を築き上げた。又柔道を強くする指導方法としては、毎日道場で一々弱點を指摘して行くのみでなく、部員が他校の大会等に出場する時用意に、平素より他校選手の業は勿論、長所短所を記録して置いて、當日の組合せにより勝負法を一々授けた。勝つても負けても、大會や勝負の歸りには、三田の藪そば等に立寄つて、一々當日の勝負振を批評し合ひ、遂に立上つてそば屋でドタンバタンとやるのが常であつた。

三十四、五年頃より四十年頃にかけては、東京を第一として學校柔道の發展時代で、塾でも早稻田、高師、帝大等には常に戰備を備へて置く必要があつた。今でも忘れぬが三十五年頃であつた、當時迄強い選手を育てるに特別に盡力し

て居られた諸遊君が、卒業後一時郷里に歸る事になり、道場に別れに來て僕の手を握り、「君は體も大きいから獰猛に稽古して是非三段迄にはなつてくれ」と、涙を流して拜む様に頼まれた。尤も當時學生には、三段は一人位しかなかつたが、如何に先輩があつたかを示す一例とならう。

其後僕等も、是等先輩に感化されてか、三月頃新入生が入塾すると、まるで刑事の様に新入生を物色して、之れはと思ふのはドシ／＼道場に引張り出して物にした。又クラブの湯には、何時も二時間位入つて居つて、新入生の體格を見て、之れは育つなと思ふと、アンパン位を大に奢つて、自然に親しくなつて道場に引張り出し、君は有望だ、君はタチが良いと、オダテて物にする。少し自惚れるとポンポン投飛ばす。悲観したなど察した時は、比較的有名な選手ではあるが、之には勝つと思はれる選手を選んで、それと勝負させて勝たせ、大に氣を良くさせては又大に鍊へると云ふ風に仕向けて了。前記の四天王の如きも、皆クラブの湯で見出した玉の中の金剛石であつた。

明治三十六年迄は、山下九段（當時六段）が塾の先生であつた。其末年頃には先生も大部永く勤続して居られたので、何の部員も皆子供に見へたらしく、いづれかと云へば稽古のさせ方は寧ろ軟らか過ぎる位で、元氣な部員から見れば餘りに厳格さと強さが（先生自身の強さにあらず仕向け方の意なり）足らず、而も年齢の割合には、自から稽古をされることが餘りに少なかつた（當時三十五六歳位であつたか）ので、不平もあつたし、部全體の稽古は、講道館邊りのそれに比べると、アマイものであつた。又勝負法等も決して上手でなく、ズゴ味とハゲシサが足らなかつたが、稽古は餘り無理がなかつたので、上手ではあつたが勝負の歩合も強くなく、勝負の氣合も弱かつた。

然るに山下先生が渡米された後明治三十七年當時満鮮地方の活躍より、一時京都に引上げて來られた内田良平先生（當時四段）を塾の先生に迎へた。處が内田先生は、全く全身之れ元氣と云ふ獣猛兒で、稽古も熱心であるが總てが眞剣的であり、研究的であるので、所謂『スキガナイ』稽古で、弱氣が大嫌ひ、少しでも弱味を見せるとき、ビシ／＼突込んで來ら

れる。苦しくても決して参らぬ、飽く迄決戦的で、即ち稽古が眞剣勝負的である。然しそうではなく、品位あり、軟か味のある柔道らしき柔道であつた。或る時秋山孝之輔君（當時初段）が稽古して貰つた。秋山君は山下先生の甥で、先生の宅に居つたので、業が上手で、殊に腰に来るのを裏投に行くの得意とした。それで秋山君は内田先生が拂腰（先生は千鳥足に踏み込んで拂ふ拂腰は得意の業であつた）に來られるところを裏投に行つたが、上に乗られたので下から十字縊に行つた。すると先生は泡を吹き出された、詰り落ちたので、秋山君は驚いて下から脊中の活ツボを二三度打つと先生はフツと眼を開いたかと思ふと『ヨイシヨ』と立つて、笑ひもせず稽古を續けられた。又先生を迎へた當時、先生は久しく稽古されなかつたので、足の裏皮が薄くなつて居つた。それを毎日猛烈に稽古されたので、足の裏に大きな豆（正味二錢銅貨大）が二つ出来たが、更に稽古されたので、一つは破れて血が出て實に痛たさうに見へたので、數日休まれてはと勧めると『ナーニ』と云ふて休まない。それでも血が出て居りますと云ふと『後で拭くよ』と澄して居られた。こんな風であるから、部内全體の稽古が自然眞剣になり、強氣になり、而も稽古後の雑談には、先生が鮮満地方や露西亞等で實戦された時の経験から、稽古上の心得を話されるので、稽古は何時とはなしに油斷せぬ稽古となつて、當時相當に強くなつて居つた連中が、急に磨きがかかるつて大進歩をしたのは勿論のこと、氣風一變して、勝負の如きも著しく上手になり『氣で行く』的になつた。之れは全く内田先生により三田の道場に活を入れられたのであつた。

明治三十八年伊藤博文公が朝鮮總督に就任され、翌年に至り其參謀として内田先生が朝鮮に赴任せらるゝ事となつたので、三十九年五月飯塚先生をお迎へする事となつた。ところが飯塚先生は當時六段で三十歳位、霸氣満々元氣旺盛、而も強くて上手で殊に體が小さいので、稽古が少しも抜け目がないのみならず、講道館第一の我慢強い方であつたので、内田先生によつて眞剣的になり、又相當強くなつて居つた湯本芳三郎、箱田達磨、僕等の二段連中（實際は皆三段の實力であつた）、福田龍、平賀恒次郎、中野榮三郎、石渡泰三郎、塙本太作、黒江潮等實力二段の初段連中は、毎日〳〵打附かり、

毎日五人一組で先生に五人掛をやるが、決して勝てなかつたのみならず、一般に塾は寢業が下手であつたのが、先生に寝てもいちめられ、締められ、逆でやられると云ふ工合で、僅一年の内に非常に強くなつた。

中村、佐野の兩君卒業後は、箱田三段を大將に、湯本、僕、山田等が上級生で三段であり、之れに例の四天王と、黒江、作川、谷岡、早川、古川、柳井、鈴木、瀬良等の連中が、不相變毎日～猛烈に稽古をお願ひし、ヘト～になつた後で更に五人掛をやる。或日僕が大將で、黒江、湯本、大塚、外一人が稽古後五人掛つたが皆やられて、僕が最後に頑張つたが締められかゝつたので、右肘で懸命に突張つて居ると、先生の手が離れて僕の肘が先生の横腹に當つてグウツと音がした。それでも先生は何とも云はず立上られ「今日は引分だ」と云はれて稽古を終つたが、翌日先生が來られぬので電話すると、左の肋が一枚折れたから、今日は休むとの事であつた。一同驚いたが、先生の我慢強いのはこんな風であつた。

先生の御指導は、實に義塾の柔道を完全に仕上げられ、四十年四段三人、三段二人、二段以下四十名を數へ、天下無敵と豪語せる時の東京帝大の黄金時代に、三段は僅に二人、以下二段初段のメンバーで、之れと堂々の仕合をやつて、當時の柔道界をアツと云はせ、四十一年以後四十四年迄、前記四天王によつて、學生柔道界の王座を獨占し、更に飯塚茂、平岡義夫、清水耕作の諸豪を始め、中野森藏、阿部兄弟、五島兄弟、菅原浩、岩崎兄弟、淺見兄弟の如き、學生柔道界には勿論、天下の柔道界のピカ一として輝く強勇を輩出し、難有くも昭和御前試合に四選手迄も出すに至りたるは、先輩諸君の苦心と努力に由る、我部傳統の部風の然らしむる所なるべきも、内田先生によりて活を入れられ、而して更に中村愛作君等の如き中興の士が、多年献身的に努力せられ、部風は一段と磨かれ、勇名益々轟き、而して此所に我が飯塚先生を迎ふるに及んで、大塚莊亮、平賀恒次郎、永瀧松之輔、石渡泰三郎、故塚本太作、中野榮三郎諸君が、相前後して活躍せられ、實力ある眞の隆盛を見るに至つたもので、後進の士は宜しく先輩の苦心努力と、先生多年の御指導とを回顧し、日本最古の歴史と名譽を有する、慶應義塾體育會柔道部を、益々向上發展せしめ、人として又柔道選手として、天下に雄飛す

べき幾多の後進を教導せられん事を切望する次第である。

話は遠ふが明治三十二年義塾の留学生として洋行せられ、堂々たる學者となつて歸朝した柔道部の先輩、故青木徹二博士は、在塾當時は二段位であり、歸朝後義塾大學部の教授として塾生の人望を一身に集めて居られたが、少しでも暇があると、道場に来て子供相手に稽古された。當時の柔道部長は鎌田塾長よりも先輩で、元刺客として中津藩から上京して、福澤先生を付けねらつて居つたと云ふ大先輩の濱野定四郎先生で、いつも朝から酒氣を帶びて居られ、八丈の着物に黒羽二重の紋付羽織で袴無し、それで英語を教へて居られた變り種であつたが、大分老齢なので部長としての塾内活躍は一向駄目であつた。そこで濱野先生に隠退して頂いて、新進氣鋭の青木先生に部長を依頼すべく部議一決し、青木先生の承認を得たが、扱て濱野老先生を断る一段となると、だれもが名案を出さないばかりでなく、使に行く事さへ引受ける者がない。たうとう佐野甚之助君と僕とが行く事になり、酒一升を持参して、三田四丁目稻荷山下の先生宅を訪問した。すると先生は、晚酌に陶然として居られたが、茶の間に通され、早速茶呑茶碗に一升徳利から冷酒を注がれて進められた。飲みは飲んだが話が切り出せない。すると先生が何しに來たと云はれたので、愈々困つた末『實は此頃心外な事がありますので、先生に一言御願ひしたいので參りました』。すると先生は、何事だと問はれた。此所だと思ふて『實は御承知の通り、柔道部の先輩青木先生が歸朝されました。一向部の爲に働きません、本來なら先生の如き御老人に、部長と云ふ面倒な御仕事を永く願つて居りますので、青木さんあたりが先生に代つて大に部の爲めに働きかねばならないのに、知らぬ顔して居られるのは不都合だと思ひます。で、青木さんを働かすには、部長にでもしたら止むを得ず働きかれると思ひますから、部長にしたらどうでせう。何なら先生から命令して頂きたいのですが』とやつて、腋の下をそつと拭いた。すると先生は『青木はケシカラソ、若いクセに、己れが話してやる、必ず話してやるが、君方からも青木に濱野が云つたと云ふて、部長になれと傳へてくれ』。ではさう致します、左様なら、と即刻辭去し、門前でホツト一息。斯くて青木新部長を迎へ、濱野

先生には大型の三組銀盃を記念に贈呈した。が、然し悪い事をしたと今でも相濟まぬ氣がする。

故青木博士は、實に熱と意氣の人で、學者としてあれ程の人となられたのも、官學連中に負けてはならぬと云ふ意氣と天性とが然らしめたので、部長としての青木先生は、實に模範と云ふか、理想的と云ふか、全くの名部長で、血に燃ゆる若き部員に熱を吹込み、又一面には對外試合を獎勵して稽古を盛ならしめ、自から道場の人となつて幼年者の友となり、人一倍血の氣の多い連中には、酒盃の間に中庸を進む塾風を吹込み、脱線を未前に防ぐ等、全く部の爲めに盡された。三十七八年頃より大正にかけて部の隆盛を見たのは、實に先生の力が其半ばを占めて居る事を後進者は忘れてはならぬ。今回部史が編纂せらるるに當り、先生を想ふの念愈々深いものがある。

これも又他の話だが、三十七年今の綱町の道場が建築され、山上に在つた六十疊敷の豚小屋式舊道場より、當時は正に御殿の如く感ぜられた新道場に移つたことは、全くの劃期的發展であつた。彼の道場の間取の設計は、九州久留米に在つた南筑武術館と、福岡市の天眞館道場を掲き混ぜたもので、僕の設計である。三方を窓とし、控席と稽古場との高さの差を少なくしたのは、風通しを良くして、衛生的にしたのであつたが、今にして考へると、滑稽なものであつた。グラウンドに面した屋根は、野球の時のスタンド代用にすると云ふ塾の案であつたが、使用する時は、柔道部に先取権を與へると云ふ事で承知した。建築費はたしか五千五百圓位であつたと記憶するが、請負者は多年福澤家に出入し、福澤先生の信任厚く、又先生を崇拜して居つて、千住大橋の南側に『當今の世の中で、ワカラヌ事があれば、何事に依らず、三田の聖人福澤先生に聽け』と、高札を出して居つたことがあると、長沼の小川武平翁に聞いたことがあつた千住の金杉大五郎翁で實際の仕事はその第二世がやつた。資金は部員が二千五百圓位塾員塾生より集めて、尻は義塾當局で拭いてくれた。金杉氏も三百圓位寄附してくれた。寄附について滑稽な話がある。それは寄附募集を始めた當時、部の先輩で越後柏崎の富豪牧口義矩氏が寄宿舍に遊に來て、金澤君と僕等が舍監室で話して居つた。すると、牧口氏の身に着けて居る物を見ると、

白金に寶石入りのカフス・ボタン、白金にダイヤのネクタイピン、白金の時計に白金の鎖と云ふ頗る飛切りのハイカラなで、一體牧口さん、貴下は五千圓位の物を身に付て居るなあと云ふと、さうだね、其位あるだらうと來た。そこで金澤君が其十分の一でもよいから道場建築費に寄附し給へとやると『其位なら』と至極輕やかに答へた。べた。其翌日金澤、中村の兩幹事は、越後柏崎に急行して、否應なしに五百圓受取つて來た。之れで寄附金募集は大に進捗した。然し輕く牧口氏が口から出した『其位なら』は、失言であつたらしいとの事である。

## 一五 黒 帯

### 高 橋 順 之 助

私が柔道を始めた頃、私の中學時代の母校、明治學院の柔道師範は、まだ藤崎の姓を名乗つて居られた塾の柔道部の先輩、箱田さんであつた。従つて、塾の當時の猛者、秋山さん、五月女さん（今日の湯本さん）などが先達で、塾の元氣の好い連中が、代る／＼指導にやつて來られた。學院の道場は寄宿舎の地下室の汚ない所であつたが、仲々盛んであつた。

元來私は、父が蚊の脛と云つて居つた程であつたから、頗る付きの瘦っぽちであつた。けれども、先祖譲りの負け嫌ひを元手に、近處の我鬼大將であつた。處が、對手が大きくなるに連れて、腕力の強いのもゐる。こつちは唯威張つてのみは居られなくなつた。

そこで、武勇傳をその儘に、武術がひどく習ひたかつた。習ひたいは習ひたいが、少さい者に投げられるのが、何となく恥かしいような氣もして、じつと堪えて居つた。が、その内に學院の柔道部に入門することになつた。多少の授業を覺

え、その上、身體がメキノヽ太つて強くなり、柔道をやらない連中から、幾分怖がられるようになつた氣もするので、忽ち熱心な部員となつた。

それと共に、柔道の前には、力も體軀も役に立たない事を知つた。むしろ恥かしがつて居つたのが無意味であつたと後悔した。弱い者が強い者には敵はないことは分つてゐるが、その補ひはある程度まで稽古で取返しが出来る事も知つた。こうして柔道は自ら整つた順序を教へ、一種侵し難いものと思ふやうになつた。こう考へて見ると、投げられるのも、押えられるのも共に嬉しかつた。

所が、種々なことで、この學院の柔道は衰微した。已むなく師範なしで横好き連中のみが、自分勝手の剛道をやつて居つた。私の稽古の悪いのも、肝心の土臺が斯ういふ突張りの故であつたらうと思ふ。無理な力を出して怪我もした。杖をついて歩いたこともある。稽古は最初に於て大に考へねば後になつては取返しがつかなくなる。

それから私は兵學校への入學準備で、暫く此剛道もやめた。何事でも大成をせぬ中に、中絶するのは禁物だ。海岸の埋立と同じく、折角埋めた土も、途中で止める、何時の間にか浪が漂つて、跡方もなくして仕舞ふようなものだ。

志を翻して明治四十年に、塾に這入つた頃には、相當やれる積りであつたのが、自分がら呆れた程やれなかつた。漸く先輩の口添や、當時二段の中野榮三郎兄の肝煎でもあつたのだろう、四級になつた。

塾の四級は、茶帶が締められ、一度落されて活の一手を許された上に、學生として皆一見識を有して居つたので、中々嬉しかつた。

私は中野兄の誘掖に善導され、毎日猛烈な稽古をした。所が、何時も勝負の結果が悪かつた。従つて昇級もしない、飽いて来る、益々稽古を怠ける、時には無理な手を用ゐる、禁物な力を出す、膝に大怪我をしたのも此時だ。自分の稽古の悪いのを棚に上げて、一時は柔道を呪ひ、止めたくなつた。

こうした時にも、中野兄は親切に私の手を引いて呉れた。お蔭で稽古にも精を出す、勝負の成績も良くなり、昇級もする云ふ風になつたので、又面白くなり、愈熱心に稽古を勵んだ。塾の寒稽古は勿論のこと、講道館の土用稽古にも皆勤すると云ふ精勵振りで、とうく有段者になつて、黒帯を締められるようになつた。全く中野兄と諸先輩とのお蔭だ。それと今一つは、飯塚師範の心身練磨の體験より得られた貴い日々のお教訓の賜物だ。

是より先四十二年の春、天は親切なのか、惨酷なのか、私の胸に疼痛を呉れた、當時神經質であつた私は、師範のお言葉に背き、醫者の云ふことを聞いて、半ヶ年間精神的に苦しみぬいた。さうしてゐる中に、漸く胸の病氣でない事が知れたので、師範に面目ないと考へると共に、永い體験による師範の確信ある眞言に、より一層の渴仰の信念を強めた。

心身練磨の中途、知らぬ間に、手や、足や、背や、胸や、腰を打つことは得て有勝なことだ。その痛みが、身體の調子で出て來ることもあるだろうし、又、事實病氣があつて出來ることもあるかも知れないが、緊張した精神力は凡ての邪氣を征服するものだと、師範の金言だ。眞に柔道の修業には、克己が必要だ、勇氣もだ、忍耐もだ。こゝに健全なる精神が育つのだ。

又私が小さい時厄介になつた人の教へに、兎角、生兵法は大怪我の基である。小人とは少し許り水の這入つて居る徳利のよくなものだ。少し許り水が這入つて居るので、一寸、振られても奇聲を出す。大智は愚人の如しと云ふのも、無爲無心にして始めて自然の玄妙を會得するのも、徳利に一杯水が詰まつて居れば、いくら振られても音を出さないと、這間の妙味を同じうするものだろう。言ふ勿れ、空の徳利は振られても、音を出さないと、其れと之れとは自ら輕重の別があるではないか、とは恩師の遺訓だ。

私には在塾中の忘れられない事柄であり、又終生の教であると考へて居る試合と、稽古とが二、三ある。

その試合の一つは、塾の明治四十四年秋の大會で、講道館の佐藤寛吾君とのそれだ。この勝負で佐藤君は私を輕々と肩

車に載せた。私は網の中の魚だ、俎板の上の鯉であつた。佐藤君は作戦か、それとも嬉しさの餘りか、又は誇りたさの爲か、頗る人もなげに、私を肩車にのせた儘、あの廣い綱町の道場を、是見よがしと三遍も廻つた。

この敵手の傲慢振りは、塾の柔道の隆盛に對する、一部の反感の片影であつたかも知れなかつた。人の良い私も尠からず自尊心を傷けられた。昔であつたら生かしては置けぬ所だがと、慚愧もし、興奮もした。併し私は心の中で、そのまゝ投げられても、決して、一本にはさせまいと覺悟した。投げられたなら、必ず體を替はして見ようと決心した。

佐藤君は投げた。而も投げた私の身體の上に、自分の頭を故意と當てるようく笑いて來た。私はひらりと體を替はしたその刹那、佐藤君の頭は、すれ違ひに却つてドンと音を發して壘に打つかつた。相當痛かつたらう。

見物の思惑は兎もあれ、私は獨り誇りを感じた。負けて勝つたと考へた。結局、此勝負は背負投で私が負けた。けれども、私には一種の體驗が出來た。それは捨身の安全と云ふことだ。是は私の一生の處世訓で、柔道をやつた爲に得られたものだと、今でもほくそ笑まれる事柄だ。

今一つの試合は、その翌年講道館で甲佐君との立合である。何でも昇段詮衡の爲の試合であつたらう。當日、私は名譽を贏ち得たい興奮の爲に、元氣を付けようと、その朝生玉子を多量にやらかした。講道館に着くと、どうした具合か、大變な下痢だ。二度、三度、見る／＼元氣は衰へた。併し、立合の時間は切迫して来る、戰場へ出て敵を向ふに廻して腹痛で御座る、治るまで待たれよと、どうして云へよう。私は最善を盡して立合を決心した。

今だから平氣でこんな話が出來るが、當時は、逃げたとか、言譯どとか、云はれたくない一心が旺盛であつた。泣言は武人の恥と、黙々として、寧ろ決死の覺悟で立合に臨んだ。

甲佐君は元氣であつたのかも知れないが、私にはそうは考へられなかつた。弱つてゐる私を投げることは出來なかつた。私は懸命に立會つた。嘉納師範前の机の下で、私の掛けた横捨身は、確かに、甲佐君を仕留めたと考へた。従つて、元

氣はなかつたか知れないが、此點から見て悪い結果とは考へて居らなかつた。所が、嘉納師範のお聲掛りで、あの態は何だとの酷評であつたのことだ。

茲で、私は塾の師範先輩の面目許りでなく、塾の柔道部に泥を塗つたと慚愧した。言譯は無用だ、何とかして此不名誉を拭ひたい、併しその春には私の卒業だ。それも叶はぬ。どんなに氣を腐らしたか判らなかつた。當時、私は此不名譽の責を負うて、黒帯を返上して、部員たる事を辭するが、最良の道だとまで考へたものだ。

けれども、私は別に考へた。柔道の勝負が一々内面的事情を考察するの違なく、比較的、形の上で事を決するのは成行上、已むを得ないことだ。吾等の柔道は終生だ。かゝる事態も、柔道修業の一一道程に違ひない。不遇の中に、人生の玄妙を見出すのが柔道であると考へた。それで、ノメ／＼と、今でも有段者に加はつて居るのである。

柔道の修業は、人の心に偉大なる鍛錬を與ふるものである。私の稽古中感じたることを云へば、襟を取りに行く腕を、直ぐ様引張り込んで跳ねられた吉武さんの妙手、武術に痛いは禁物だと、嚴戒の平賀さんの豪氣、相手を粉碎せすにはやまない、石渡さんの意氣と敏捷、袋の中へ物を納めるように、丸めてゆく塙本さんの理詰の稽古等は、皆處世上の要諦で今猶忘れられない。是等は柔道をやつた者のみの得られる境地ではなからうか。

## 一六 在塾當時の思ひ出

高 橋 貞 作

義塾柔道部の全盛は、何と申しても自分等が在塾當時の明治四十年頃より大正の初め頃と申さねばなるまい。

當時は平賀、中野、塚本、石渡、諸兄の四段を筆頭に、古川、平岡、清水等の強豪雲の如しと言ふ有様であつた。從つて講道館の春秋二回の大會には、一方の組を大將より五、六將迄壇で占め、宛然三田柔道部對講道館及び各大學の聯合試合の趣があり、實に壯觀と申すべきであつた。

業に於ては正に然りであつたが、氣品の方面に於ても申分がなかつた。兎角業が出來て來ると亂暴の弊に陥るのが普通であるが、我等の柔道部にはそんな心配は微塵もなかつた。

これは福澤先生が、心身の順は柔道と看破せられ、訓戒せられた爲めでもあらうが、深く探究して見れば、義塾の學風の然らしめた所と私は信する。即ち『慶應義塾は單に一所の學塾として自ら甘んずるを得ず云々』と申されて、義塾の目的を示された故先生の大精神が、渾然として從來の柔術に融化し、茲に三田柔道なる智德を併せたる體の道が生れ出でたものと、私は見る。實際當時柔道の眞價は、三田に於てのみ見られた様にも思はれる。氣品・プラス柔術が即ち柔道なのである。正宗の名刀も持手に依つて其の眞價を異にする。特に柔道修業の青年が之の理を三思する必要があると思ふ。

最後に思出の一つとして、故塚本太作兄に就て申述べて見たい。兄は當時四大天王の隨一として、我が柔道部に盡された事は申す迄もないが、業が切れる上に、溫和で人柄が如何にも立派であつたから、後進を誘導して柔道に精進せしめる爲めには、最も適任者であつた。同兄の稽古を受けた人は、多分筆者と同様の感懷を持たれる事と思ふ。同兄は多年大日本製糖にあり、精勤恪勤遂に重要な地位をかち得、更に大を爲さんとするの秋、突如病を得て逝かれた。悔みても餘りある事である。當時を追憶して感慨無量なる者獨り筆者のみではあるまい。

# 一七 その頃を語る

(一) 三光寮

飯塚茂

師範を中心として、腕で來い、頭で來いの連中、白金三光坂上の師範邸合宿、塾頭格が五月女(後の湯本)平賀の兩君。中堅が中野榮三郎、石渡泰三郎、塙本太作の諸君、後に早川章次郎君が加はる。塾生には五月女兒、菅井國、井上松、吉澤憲、長谷川三郎、鹿島三郎君等、その遊星としては清水耕作君に、今支那の要人として羽振りのよい鄭梅雄君。

この寮、塾の出來事では何んにあれ一方を承はらうと云ふ男子の一團、やる事、行ふ事が學生らしかつた。お頭格が四段、中堅所が三段のバリバリである。皆強かつた、勝負で負けたことのない連中である。

東大に杉村あり、慶大に中野あり、一双の巨豪であつた。恐らくその頃柔道ボーアイは杉村に非ずんば中野に眞似た。杉村は今の國際聯盟政治部長兼事務次長、杉村法學博士である。その頃博士は横には大きくなかった。六尺に近くして二十二貫。右の跳腰が利き技で、ゆつたりとした勝負振り、嘉納塾の若者頭で十哩競泳の優勝者。學校が帝大の英法、そして三番二番と云ふ所である。

中野君の鐵縁の眼鏡は光つたものであつた。普通部生え抜きで、二番となつたことのないと云ふ秀才。普通部から試験勉強もせずに、其當時入學試験が一番六かしいとされた藏前高等工業に、一番で入學したといふ人物。腕も偉いが、學問も一番と云ふ男子で、怒つた顔をせぬ人であつた。幼年組にもてた大將である。右跳卷込の名手、そしてどんな亂暴な新入生でも、二三度會談すると、之を塾化させ塾風に巻込むと云ふ一種不可思議な腕の持主、吾々三田道場ボーアイの目標であつた。筆者等は今でも中野君を目標として居ること昔の通りである。恐らく其の當時のボーアイ共も、筆者と同感の者が

少くあるまい。今は野田醤油會社の重鎮であり、隊長である。

『石渡の亂取勝負の如きは、吾が講道館柔道勝負の理想に近い』。之は其頃人の口に上つた讃辭であつた。四十三年秋の講道館の紅白勝負に、紅軍の副將として、石渡君は同段の者四人を投げ飛ばし、其當時學生柔道界の豪の者であつた、白軍の大將大主將入來君を跳ね飛ばしてしまつた。審判して居た嘉納師範三嘆して、日頃の自尊を捨てゝ石渡君を講道館の第一人者としてしまつた。講道館始つて五十年、今日迄嘉納師範を三嘆させしもの、吾が石渡君一人である。

塚本、早川の兩君は死んでしまつた。

早川君は背負の名手、亡くなつた俳優の宗之助程のやさ男、而かも頑固の背負、どんな場合でも、敵がどう變化しても背負の『掛け』の姿勢である。絶対に背負ときまつて居つた。

塚本太作君の亡くなつたことは、筆者には如何にも悲しい。筆者が今日あるのは、塚本君と中野榮三郎君の賜ものである。兩君は筆者の守本尊であつた。

其後塚本君とは一層の親しみを感じた。塚本君には塚本イズムと云はれた程、一種の形があつた。柔道の腕も百點、頭もよし、卒業にはラストヘビー數本、とう／＼首席である。そして學生時代より立派な社會人であつた。圓滿の骨相、玉の如き人格、理想的塾生といふと塚本君を思ふ。

筆者は塚本君が上海に初めて赴任するのを、舊新橋ステーションに見送つた、その當時を覚えて居る。塚本君は思切つて遠くに赴任するものだと感心した。昨日は人の身、今日はわが身の上。大正四年春も更け、楊子江の兩岸の柳が、芽を青々と出した頃、筆者は南航の途中、塚本君に上海に出迎はれ、兄に逢ふた思ひ、一夜をとう／＼談じあかして、新婚の夫人を驚かしてしまつた。大正十四年の夏には、その塚本君を英領の新架坡にて迎へ、同行爪哇に旅行した。亡くなる前

年の冬には、門司のステーションに出迎へられた。先輩で同志で、こんなにも往來會談した人はない。君との會遊の地で君の悲報に接して、一人悲しみに泣いてしまつた。

清水耕作君は筆者と郷里を同じうし、一年半を郷里の學校に机を並べた所謂竹馬の友である。劍道部の寵兒であつた。三光寮に這入つて、柔道に宗旨換をしたのである。バランスの取れた身體、すんなりとした稽古、その稽古熱心は一年有半にして二段になつてしまつた。筆者と雁行して筆者が負けたわけである。角力の選手でもあつた。本科の中途で、志を南に立て、とうやく南米に押渡つてしまつた。今でこそ南米を日本の移民國とし、政府も後援して居り、南米行を平氣にして居るが、その當時としては、吾々の間には珍らしき雄圖であつた。十年の月日を彼の地に暮して其歸朝の途、筆者と久し振に新架坡に會した。十年前無勝負に終つた角力の決勝をやるべく下船、直ちに三井物産會社の土俵に終日二人きりで數十番の角力を取つて、在留邦人に一つ話を遺した人物である。左右の内股が得意であつた。

塚本太作君の弟、福次郎君、紅顔の美少年時代暫らくは寮に暮した。負嫌いの君は、その兄君と相反するの性格の持主である。幼年組二級、水泳部のチヤン、頻りに胃を悪くして居るが、いざ勝負となると、左右の内股。この少年、初段二段を手こずらせたものである。後に言ふ山本忍己君、島泰君と共に三幅對で、講道館の猛者共を恐ろしがらしたものである。

菅井國之助君、竹を割つた様な柔道、敵がどうあらうと、立つとすぐに右の大外落を持つて行く。うまく行くと敵は木葉微塵である。その代り、巧者の相手には、何時も出ると一本である。高師との勝負が眼に見へる様である。亡くなつてしまつた。

三光寮は吾々には深い思出である。十五疊の西洋間に車坐して、秋の夜長を師範を中心として明日の勝負の研究に首を捻り、又二階の西洋間に各々一日中陣取つて、文字通り猛烈な試験勉強、出るにも入るにも一身同體と云ふた形である、

お互が高く持し、兄弟の愛を以てした。  
落葉の頃には特に思出が多い。

### (二) その頃の猛者

曰く、中野、塙本太、石渡、早川、古川、金子忠、山本、塙本、澤山、平岡、關、松尾、嶋泰、菅井兄弟、高橋順、瀬良、作川、堺、牛久、徳永、鶴淵、岡安、中野森、阪東、富安、葉山、小山内、尾上、岩崎清、岩垂、關川、神崎、片山月成の諸君等、等。

其前後、三田道場は一つの黄金時代であつた。特に相共に勵し、相共に信じ、相共に和し、他の學校等に見られぬ友愛美しいものがあつた。そして個々としては勿論一癖も二癖もあつた。

柔道部は斷然塾の體育會をリードして居つた。又部員の有段者は同じ師範をいたゞいてゐる兄弟校に師範助手として手分けをして教へて居つた。一種の昇段登龍門であつた各校の大會にも、部員は花形選手として出場した。講道館春秋二季の紅白勝負には、一方の大將より、數人まで必ず塾で受け持つといふわけであつた。

猛者の中の大體は、三光寮の項で書いた。其他澤山福彌太君は特種人物であつた。段外二級頃から三段格の姿勢であつた。勝負運には恵まれなかつたが、福岡男子、意氣に燃えて居つた。國士の如き風貌は、よく道場頭として重きをなした。平岡、關の二君は、筆者が三田道場初見参頃の花形であつた。西川一也君といふ美少年の腕利きは、前二者と共に、将来を望まれた。三君とも中途退學、終りを完うしなかつた事は残念な事であつた。

作川君の面魂、堺君の元氣は、恐ろしいものであつた。後の阪東君の元氣が之に似て居る。山本、塙本福、嶋泰君等の柔道は、天才的であつた、勝負味がよかつた、技がきれだ。

元氣者の徳永君、聲自慢のベヤー君、道場の人氣を背負つて居た。

金子忠、牛久、鶴淵君等は同形の稽古と勝負で、よくいふとお大名式であつた。高橋順君の技のセオリストは有名である。中野、富安の二君は九州男子である、初段格でやつて來た。然し入塾當時はそれ程の腕ではなかつた。此等の人々の稽古は火の如くであつた。特に中野君の猛烈さ、流石の三田道場狭しとした。二年過ぎの中野、三年後の中野、とう／＼塾の大將となり、講道館優秀選手となつてしまつた。馬力は彼をして更に角力部の飛將軍たらしめた。

岩崎清一郎君の粘りに、筆者など大いに苦しめられたものである。若し腰を痛めざりせば、大物になつて居りしなるべきものをとの感を深くする。

後に上海邊りでならした小山内君は、尾上君と同形の柔道であつた。師範柔道である。高等師範との試合で、相當花形であつたものに鶴淵、片山の二君がある。何れも他道場で出來上つたもので、熟式柔道ではなかつた。二君とも結局大成しなかつた。二君を思出す度に柔道は特に氣概であると云ふ事を痛感する。

黄金時代である、猛者名手は次から次にと現れる、書きつくせない。當時の勝負帳を見ると感慨轉た切なるものがある。それにしても山本、塚本福君の跳腰、内股、嶋泰君の足拂、小外の技の美しさ、勝負度胸の剛健さ、この部史に特筆の價があらう。

此等の達人、名手、三田柔道を社會に活用して御座る、活きた柔道である。

### (三) 綱町の寵兒

何れが櫻、何れが梅、道場の疊の塵を、三度の飯程好いて暮した連中、どれもこれも寵兒ならざるはない。

阿部英兒、阿部大六の兄弟、天下にその名を轟かす、三田道場寵兒の隨一である。

淺見君が角力を止して、眞の柔道に精進したならば、吾々の云ふ理想の巨人柔道選手として、茲に昭和三田三人男が出来上つて居たであらうが、淺見君の爲めに惜しむものである。

筆者は三田道場に懸つてゐる先輩の名札を丹念に見た、面白い、飽く事を知らぬ。各人の全盛時代を追想して見た。興味の湧きて盡きる時を知らない。數百の掛札の中に三枚の掛札が頭にコビリ付いてしまつた。

名人石渡泰三郎、達人山中駿吉、免許中野森藏である。

三田道場始つて以來、石渡君の柔道の如き氣品と技の爛熟さは、道場第一と言ふて間違ひないと思ふ、嘉納師範が三嘆せしは實に石渡君の三段時代、未だ荒削り時代であつた。吾々の素人柔道として極致のものである。

山中駿吉君の勝負味、左右の背負と腰のヒネリ、其氣魄は、正に天下一品、達人柔道である。明治四十三年の秋、一つ橋高商の大會、今こそ老いたが、その頃の徳三寶、天下無敵と豪語す。巨象の如き三寶、右背負で投げられ立ち上るを左の背負一本、筆者は柔道生活三十年、こんなにも痛快な勝負を見た事がない。山中君は二段であつた。

中野森藏君、卒業前には柔道の技と云ふものをよく呑込んで稽古し勝負をして居つた。講道館柔道に若し免許皆傳といふものがありとせば、中野君はその適者であらねばならない。

## 一八 各時代の人々

(一)

松 永 進 一

私と慶應義塾柔道部との關係は、慶應義塾と私との關係の大部分であると云つても過言ではない。それは私の様な性

格の人間が、つまづき乍らも慶應義塾を卒業する事が出来たのは、全く柔道部に席を置いて居たからで有る事を充分知つて居るからである。

福澤先生は『心身之順是柔道』と我柔道部員の指導精神を示された。禪門で所謂『平常心是道』と思ひ合せて、故先生が柔道を何う云ふ風に解釋して居られたかを思ふ時、三田の柔道部員は故先生の御言葉に對しても、報ゆる所がなければならぬと思ふ。私は在塾當時先輩から、福澤先生は體育會の内でも特に柔道部に關心を持たれ、特に此七字を柔道部員の爲めに下さつたのだと云ふ事を聞かされて居た。塾の柔道部に尊むべき氣風が存續して居るとすれば、此言葉の餘韻に外ならぬと信ずる。

由來柔道部は、慶應義塾の學風を指導する體育會の中心勢力となり、故福澤先生が義塾指導のモットーとして示された『慶應義塾は一個の學塾を以つて甘んずるを得ず云々』の發揚に盡瘁し、塾風の涵養には陰に陽に重大なる貢獻を積んで來たのである。

此の名譽ある歴史を有する柔道部に、十ヶ年間御世話になつた私が、學窓を出て十ヶ年を過ぎた今日、尙ほ社會の地平線下に鳴かず飛ばずの生活を送り、衷心忸怩たるもの有るにも不拘、我部史編纂の快學の報に接し、悦び勇んで其一行でも飾らんとする理由は、私の柔道部時代の思ひ出が、時間と距離を隔てるに従つて、又社會の表裏を見れば見る程、より懐かしく、美しいものとして畫となり詩となつて行くからに外ならない。材料を集める事と時間が許せば、在塾十ヶ年間を通じて書き送り度いのであるが、其んな事は到底今の自分としては不可能であるから、在塾當時の記憶を辿り、自分の生れた家の歴史編纂の参考物を送る氣で、遠慮なく断片的に書き送るのである事を、最初に御許しを願つて置き度い。

## (二)

柔道部の道場は、元三田の山の上に在つて、福澤先生御在世中はよく稽古を見に來られたといふことである。

今、綱町道場の正面床の右に懸かつて居る古い寫眞は、入部した當時隨分時代離れのした寫眞だと思つた。其中の一人は藤崎さん（箱田さん）と云ふ物凄い人で、若い時には寄宿舍に居て何か憤慨した時、何十枚かの硝子窓を握りコブシで打ち破り、時の舍監を縮み上らした事もある人だが、卒業前にはK.O柔道部の空氣を吸つて立派な人になられ、或富豪に見込まれて、其の人の勵ましに依つて英國へ留學された話も聞かされた。其後改名されて箱田姓を名乗られたが、此の人が大日本製糖會社に庶務課長を勤めて居られる時、私は二年間を其幕下で働いた事も不思議な因縁である。

今鐘紡の社長をして居られる津田信吾さん、日糖重役の金澤さんの話は、飯塚先生からよく聞かされたものだ。金澤さんは、飯塚先生が始めて塾の道場に來られた時分、塾の柔道部は強ければよいと云ふ様な淺薄なものではない、心身之順是柔道のモットーに依つて、立派な人を造るにあると云つた冷靜な態度であつた事や、又津田信吾さんは柔道部が好きで金澤さんの親友でもあり、道場へ來られて熱心に稽古を見物されるのみで、一度も稽古をされなかつた變つた人だつたと云ふ事、湯本、吉武、平賀、塙本、石渡さんの時代に、帝大と火の出る様な試合をされた事、平賀、塙本、石渡さんの全盛の時には、皆が一團となつて講道館の内でも幅を利かし、塾の柔道部の黄金時代を作られた事等を聞かされ、柔道部の歴史を知れば知る程、我等の時代もしつかりやらなければならぬと、無形の或ものに鞭撻されたのであつた。

平岡、中野さん時代に私は入部したのであるが、なぜだか其當時の明瞭な記憶がない。唯中野さんは文武兼備の良将で塾の教授になる様にと當局から熱心に懇望された人だつたが、御父さんが御醤油屋さんで頑固な方だつた爲め御許が出ず遂に千葉縣野田の田舎に引き込まれた事は、御本人の爲めにも塾の人物養成の爲めからも、誠に残念で堪らないが、孝子中野さんは自分を棄て、父の命に従はれたので、立派な道を歩ませたのだから致し方もないと、飯塚先生が口ぐせの様に殘念がつて居られた事は、今尙ハツキリ記憶に残つて居る。

### 山本、塚本時代

山本さんは青年組出身で、豫科一年生が普通部五年生から柔道を始めたのだが、熱心と努力で、人が十年もかかる所を四ヶ年か五ヶ年で進まれた熱心家だと、よく聞かされた。塚本さんは幼年組出身で、業士であり、講道館の勝負の前は夜更けまで酒を飲まないと成績が上らないんだと豪語して、實踐躬行して居られるのを時々見習った。同氏は初年組の訓育には誠によく盡された人である。其當時は青年組出身の山本氏と幼年組出身の塚本氏との両方の力が、どれだけ柔道部の部員を刺戟したか知れない。後年柔道界の麒麟兒阿部兄弟を出した素地は、此時代から作られた事を忘れてはならぬ。

### 飯塚茂さん時代

飯塚さんは學生當時から一風變つた所の有つた人だつた。立業よりは寢業を得意とし、高等師範との對校勝負に、大將として相手の大將岡部平太君と善戦され、嘉納治五郎氏の審判規定時間超過獨斷專行に依つて敗れたので有つたが、歸途先輩諸兄に慰勞會をして戴いた席上で、男泣きに泣いて、母校の名譽の爲め相濟まぬと先輩に詫びられた當時の有様は、同勝負に參加した一員として忘れられない印象が残つて居る。

### 菅井、嶋、尾上、坂東時代

此時代には、誰が傑出して柔道部をリードして居たと云ふ譯ではなかつたが、傳統的精神は、立派に發揮され、皆が和氣藪々の裡に、稽古をして居た。菅井國さんは、鼻柱の強い人で、稽古は熱心の方ではなかつたが、勝負を氣でとる人だつた。泰さんは、幼年組出身で、外見も心もやさしい懷しみのある人だつたが、相手が如何に強者でも、一度斯うと思ふと、とりひしがなければ止まぬ負けじ魂の持ち主であつたことは、其當時の部員は皆知つて居た。尾上さんは跳腰の名人だつたが、腰を悪くしてからは専ら世話役として面倒を見て居た。坂東君は、小兵乍ら全身之れ氣魄の人で、比較的沈滯的傾向の有つた道場に、同君の存在は絶えず新鮮味を與へて居た。

## 神崎、岩崎、森、中野時代

此の時代の初期には、道場内に重苦しい空氣があつたので、飯塚先生は何とかして柔道部本来の状態に歸さなければならぬと心配され、關西遠征に依つて外敵に備へる爲めに、内部の統一を計られた。第一回の關西遠征は失敗であつたが内部の團結の目的は美事達せられた。京都の武徳會、大阪の武徳會でも慘敗、當時大阪に居られた石渡さんから牛肉やの二階で、準備のない戦をして敗けた事は不都合だと、大目玉を頂戴した事を今でもハツキリ覚えて居る。此お小言は御尤も有つた。沈黙して名譽回復をお誓ひするより外なかつたのであつた。以來柔道部は復讐戦をしなければならぬと云ふ目的の爲めに、内部の區々たる問題は一掃され、強い團結が出來、暑中休暇には葉山へ合宿して、鎌倉師範の道場で稽古を積み、更に體育會ホールに合宿して稽古をはげみ、三十餘名の選手を得て、自信ある第二回の關西遠征を決行する事になつた。其當時の意氣は「風颶々の武藏に……」の柔道部々歌となつて現はれた。

京都武徳會ではオール京都と戰つて引き分け、大阪ではオール大阪と戰つて大將、副將を残して勝ち、先づ第一回の不面目を取り返したが、如何にしても京都を破り得なかつたのは殘念で有つた。但し勝敗は兵家の常、来るべき時を期すより外はない。而して我軍は此戦にペストを盡して準備した事に爲りない事は愉快であつた。

神崎さんは通稱清ちゃん、ニツクネームを牛と云つたが、それは飲む事と食ふ事にかけて、人間ばなれがして居ると云ふ意味か、又は牛の様にネバリ強い特性を持つて居る意味だつたか、其の處明かでない。清ちゃんは青年組出身で、好い人だつた。將來の有つた人だが、足を痛めてからは餘り振はず、多く世話役として盡してくれた人である。岩崎君はニツクネームを茶目と云ひ、幼年組出身で、業と機敏さの點に於て君の右に出る者はなかつたが、才子多病とでも云ふか、病氣の爲め晩年は道場に足が遠くなつたのは淋しかつた。それでも、第二回關西遠征から一同が東京驛に歸りついた時、君は花輪を持つて我事として嬉し相にプラットフォームに迎へてくれた時の事は、今尙ほ君に對する僕の記憶の數々の中の

忘れられない懐かしいものゝ一つである。森さんは、岩崎君と同じく幼年組出身で、内股を得意とし、容姿はやさしい人で有つたが、大膽で何となく人に乘せられない所を持つて居る。外柔内剛の人であつた。第二回關西遠征の時は、第一戦には立たなかつたが、世話役として人知れず一行の成功に骨を折つてくれた事に對して、感謝して居る。中野君は通稱をモリしやん、ニツクネームをオドン、第二回關西遠征の大將である。大器は晩成と云ふが、同君の柔道は大器にして、早成であつた。講道館の紅白勝負で同君の残した足跡は、恐らく空前絶後のものであつたらう。別に此れと云ふ得意の業がある譯ではないが、勝負に出ると臨機應變に千變萬化の神技を連發すること、不思議な位だつた。第二回遠征の前、山の上の體育會ホールに合宿中は、選手一同緊張して、就寝時間を厳守する事を誓つて居たのに、君が一人で數時間も門限を破つて歸つた翌朝、僕が大將ともあらう者がとカン／＼に怒つて喰つてかかつた時、悪かつたもうやらんと、神妙にあやまつてくれた事も、懐しい君に對する思出の一つだ。第二回關西遠征當時の柔道部の第一戦の事は、全く中野君と僕とで計畫もし、作戦もしたのだが、後方勤務として森さんと岩崎君に負ふ所が多かつた。其當時は他の部員諸君も皆一致團結して、気持ちの好い時代だつた。

\*

\*

\*

## 追 　　錄

本篇は題して十八景といふ。柔道部の各時代を播出した十八篇の寄稿を集めたからである。併し半世紀以上の歴史を有する我が三田の道場には、まだ／＼いくつかの時代風景が存する筈である。ところが幸にも本史印刷締切の間際に至つて、秋山萬藏君が『思ひ出すまゝ』を寄せられたのと、吉武君が更に筆を响して『昭和の天覽試合に現はれたる三田

柔道の眞價』を物せられたのは、編者の大に感謝する所である。前者はその中に柔道の時代傾向（外部に於ける一種の柔術傾向）にも説き及び、後者は天覽試合の光景を敍すると共に眞の柔道に關して平素の所懐を述べてゐる。共に讀者をして考へしむる興味ある問題を含んでゐる。

隨つて柔道部の十八景はこゝに二勝景を増して二十景となつた譯であるが、既に印刷を了した『十八景』は、種々の都合上今遽かに之を改むることもならず、右二篇は茲に追録として加へる次第である。（編者）

## （一）思ひ出すまゝ

秋山萬藏

（一）

柔道部の立派な歴史を編纂されるのに、私如き者の書いたものがその幾頁かを埋めると云ふことは、何う考へても甚だ僭越であり、全く恐れ入る次第であります。去る七月三日暑い盛りを吉武大先輩が私の勤先、馬闌の片隅に在る薄機い役所（元東邦電力現在山口縣營電氣出張所）に憩々お立ち寄りになつた時にお話を伺ひ、私としては一も二も無く同時代の阿部さん、五島さん、岩崎さん達へとお願ひしました處、皆さんは目下生憎忙しい仕事にたづさわつて居られるのだからとのお話、尙他にも其時代の柔道部によく通じた人々を勧めたのでしたが、みんな御都合が悪い様で結局『思ひ出すまゝ』を書いて送れば、立派に直す方が居られるのだからといふので、私も『それでは此方には幸ひ同時代の古賀、中本、久徳等の連中が、聲をかくれば直ぐ集まる關門地方に居りますから、此等の人々とよく相談し合つて何か送らして戴きませう』と云ふことになつた次第です。此の様な譯で自分の最も懐しい又最も愉快な思ひ出ですから、その記憶は割合判然

しては居る様なものゝ、全く思ひ出しまゝを書き連ねるので順序言葉遣ひ等滅茶苦茶で、読み難い所が澤山あることゝ思ひますが、此の點豫めお断りして置きます。

## (II)

私が學生として柔道部に居たのは大正九年から昭和二年までの七年間で、入部當時の陣容は、阿部兄弟を初め、菅原、五島、藤澤、山田、松本、小川等のお歴々が揃つて居られて堂々たる黄金時代でした。二三年すると段々卒業せられても一寸淋しくなりました。その後浅見淺一君等が現はれて又相當充實した時代が來ました。此の間外部に於ては寝業が非常に流行し出して、試合になるとよく寝業一點張りで一先鋒から大將まで終始一貫寝業で一押し通すものがよく見られました。一番目立つてひどかつたのは、帝大主催の全國高専大會に於ける試合でした。一度見學に行つたことがありました。十五人位宛の試合で先鋒から大將まで殆ど全員と云つていゝ位双方寝業で押し通すのです。立つて居る間と云ふのは兩方から出て来て試合前の禮をした後僅か一分か二分の間で、直ぐ思ひ合はした様に何方がゴロリと転がると、一方は大抵敵の股の間から攻めにかかるのです。そして大部分が引き分けとなるのであるが、若しその間に一人でも抜いたものがあると、あと全部が引き分け主義に出て大將一人を残して勝ちとなると云ふのでした。私は初めあれで一體柔道の試合と云へるのだらうかと考へた位でした。私は二組位の對校試合を見てゐる内に飽きて歸つてしまひました（私自身に寝業を觀る眼の無かつたことは勿論ですが）。が然し此頃の柔道試合と云ふ試合は、全く此の寝業専門に風靡せられた形でした。ひどいことは、中學生の試合にまで段々此の風が傳染してしまひました。此の寝業専門の柔道が非常な勢で試合と云ふ試合に流行したのに就いては、今述べました全國高専大會が大いに影響したことは申すまでもありません。（何でも一番最初は、第二高等學校が此の方法を採用して對一高戦に勝利を得たのに始まると云ふことで、眞偽のほどはわかりま

せんが、その時の同校の練習は道場を釘付けにして他へ漏れない様に秘密の中に行つたとか噂に聞いたことを覺えて居ります。其動機と云ひませうか兎に角最初の目的といふものは、之は私の餘りに皮相的な考へ方か判りませんが、恐らく柔道を修行するのでなくして試合に於て最も經濟的に有効に勝ち度い」と云ふ考へから出たのではないかと、その當時私は考へて居たものでした。今でも無論左様考へて居りますが、此の事に就いては何年頃か判然と記憶して居りませんが、確かに私が本科二年であつた頃體育會雜誌に『柔道試合に於ける寝業のこと』と云ふやうな題で短いものを載せて貰つたことがありました。夫には要するに柔道の試合に於ける審判法が其當時までの様に、立つことゝ寝ることとに就いて何等の制限も無いものとすれば、寝業専門の人は初めから寝てかゝり、相手が寝て来れば尙更のこと、例令相手が立つて來ても、その立つてゐる間は全然相手にせず足でも取つて引張り込むことをして居ればよいので、極端な話ではあります、柔道の試合には全然立業を知らなくてもよいことになる。只試合丈けの爲の柔道ならば試合に於て勝負のつき易い、結局一面から云へば負ける率の多い、そして修行に難しい立業で苦しむよりも、始めから寝業丈を修行して試合に臨む方が、修行時間の上から云つても、負けない率から云つても、より經濟的であり、より有利ではないかと云ふ理窟になつて来る。殊に團體試合では、一人勝ち後引分けで行けば結局勝ち得るのだから、自然輕薄な今のやうな世の中では此の寝業専門が流行するのだと云ふ風に述べて、結論は此の只單に功利的な目的に出でた、柔道と云へない様な偏頗な寝業専門の趨勢を、本當の柔道試合に引き直す爲には、根本的には柔道修行者の頭を武士道的に指導して行き、形式の上に於ては審判法を合理的に改正することが、何うしても必要だと云ふ意味で書いたと思ひます。

此の頃より講道館に於ては審判法が變つて来て、寝業に多少制限を加へる様になりました（勿論私の所論とは別問題に）。相手が立つて來るのに始めから自分で寝てはいけない様になりました。それで或時私は不愉快な拾ひ勝ちをしたことがありました。慥か私が二段か三段かの時講道館の紅白試合で、私は寝業は大の不得手ですから立つて行くと、相手は始

めからコロリと寝て盛に引張り込まうとし私が之を嫌つて立つて居ると、審判員（確か山口孫作氏）は二三度相手に注意して居りましたが、遂に新審判法に依り相手に負けを宣告して、結局私は殆ど戦はずしてその一人を抜いたことがあります。こんな具合で、他處では非常な勢ひで寝業が流行して居たのでしたが、吾が三田の柔道部はこんなものには少しも禍されずに、全く超然として居る形でした。概して寝業は不得手ではありましたが、夫でも全然研究を忘却して居たのでは勿論なかつたので、殊に菅原（浩）さん、松田さん等は、當時寝業で大いに氣を吐いたものでした。

其後中本吾一君（現在五段で下關中學柔道教師をし、三田出で殆ど唯一の専門家として氣品のある柔道の指導に精進して大いに好評を得て居ります）等の巧者が現はれて、網町の道場でも大分寝業の研究が盛になり、相手が寝て来るなら寝業敢へて辭せずと云ふ風に進んで行つたのでした。此の偏頗な寝業専門の流行した時代に超然として居た吾が柔道部としては一番殘念に考へるのは、遂に機會に恵まれずして帝都に於て全軍を擧げて戦ふ様な大きな對校勝負をやらなかつたことです。（すつと後で確か大正十四年の秋頃に當時五段の淺見浅一君を大將として關西遠征をやり、京都で武道専門學校と大阪で全大阪軍と戰ひ寝業に苦しめられて大敗の苦杯を嘗めさせられ、吉武大先輩等に散々叱られたことはありましたが。）今から考へると此の事は全く殘念で堪りません。例令相手は早稻田だつたにせよ、或は帝大だつたにせよ、勝敗は時の運と考へられるからであります。殊に彼の大正十二年の關東大震災さへなかつたならば、その年の秋には、當時寝業を最も得意として居た東京帝大とベスト・メンバーで對校試合をやることになつて居たのでしたから全く殘念に思ひます（當時吾が軍の總帥は阿部大六先輩だつたと思ひます）。此の時此の大試合が無事に舉行されて居たならば、立業寝業と兩校の得手が正反対であつたことから考へても、何等かの形で當時の學生柔道界には少からぬ響きを與へて居たことゝ思ひます。

## (三)

大正十二年九月一日の大震災は吾が柔道部にとつても、全く思ひ出深い大事變で、其秋の十月の末か十一月初には前にも書いた様に東京帝大軍と對校試合をやることが夏休み前に略々決定したので、吾が柔道部は暑中休暇初めの葉山合宿を終へて八月中を各人フリーに生活し、九月一日午前八時綱町道場に集合、それから約一ヶ月の豫定を以つて、道場に合宿し、猛練習をやることに申合せが出來て居ました。で九月一日の午前八時には、選手一同八月中を海に山に鍛えた眞黒な顔を合せ、全く張り切つた元氣でぶつかり合ひ、初めから餘り烈しくしない様にと云ふ兩先生からの親切な注意も忘れてしまつて十一時過ぎ迄猛練習をやり、皆腹をペコ／＼させて、旨い合宿の最初の飯にありつかうと、豫て約束してあつた山上の萬來舎に行き、料理室で焼くビフテキの美味さうな臭を嗅がされながら、日本間で待つて居た十一時五十八分彼の大震災が來たのです。彼の物凄かつた第一震と同時に全員庭へ飛び出し、尙餘震でグラ／＼する中を、飯塚、中野兩先生を中心に稻荷山の大公孫樹の處に避難しました。其の中に山上から方々を眺めると、到る處に火事が起り、之は只事でないぞといふことを皆認識し、兩先生と幹部の方々とが相談されて、殘念乍ら一應合宿を此處で解散することに決まり、夫迄に出來て店た丈の飯を山上の廣場へ出して先づ腹を造り、各自自分の家庭、或は下宿に引上げることになりました。此の時一つのエピソードがありますが、地震と火事との爲に腹の虫も驚いたか、一杯の飯がロクに食へなかつた私達を尻目に、ビフテキ幾枚かに、飯を西洋皿に四、五杯ベロリと平げた豪の者が居りました。それは當時二十才前後の元氣盛りだつた門倉森君其の人だつたのですが、後で此の大食が同君の一命を救ふ大事な糧になつたのです。之は後で同君に聞いた話ですが、同君の店が日本橋に在つた爲、合宿解散後同君は未だ其時までひどくなかつた火事の中を店へ馳せ付け、店の人々と一緒になつて荷物を船に積み込み漸く出したのでしたが、いざ避難と云ふ頃にはもうすつかり周囲は火の海と

化し、遂に船も焼かれて、店の人々とも離れ離れになつてしまつたのです。其後同君が煙の爲にひどく眼を痛めて、額と頭に方々火傷しながら再び道場に現はれたのは確か二日の夕か三日の朝でしたが、此の間同君が生死の境をさ迷ひ乍ら、水浸りになつて火と煙と戦ひ續け、尙よく其氣力と體力を失はなかつたのは、日頃柔道で鍛錬した身心と、彼の時大膽にも沈着に平げた最初にして又最後だつた對帝大戰練習合宿の飯と、ビフテキによるエネルギーがあづかつて力あつたことは、確かな所だらうと思はれます。

合宿解散後尙道場には木村喜八郎、木下米松、久徳義夫の諸氏に私（皆地方から出て來た下宿住まひの者）位が居残つて居ましたが、此の合宿殘留組は、廻るに家無き彼の大震災直後に四、五人で道場の大廣間を占領して安眠し、塾監局の方々と一緒にになつて、稽古衣姿で三田山上の自衛隊となり（後では四谷の醫科の方まで出かけましたが）實に痛快な幾日かを送り、十二、三日頃芝浦沖から軍艦陸奥に乗つて、清水港經由、夫れぐ故郷へ歸りました。

#### （四）

試合の思ひ出としては前に述べました様に、大正十五年の關西遠征を除いては私共の居た時代にペスト・メンバーで戦ふ様な大勝負はやりませんでしたが、大體に於て餘り芳しくない成績を遺して居ります。

第一に毎年の恒例となつてゐた對四校聯合（農大、水産、高工、日蓮宗大學）勝負で初めて負けの黒星を造つたのは私共の居た時代です。次に確か大正十四、五年頃東京學生柔道聯盟で七名宛のリーグ戦をやることに定まり、吾軍も淺見、木村、山川、阿部（芳郎、秀助）、松田、門倉、岩崎、五島等の諸氏を選手として出場したことがありましたが、此の試合は學生聯盟の最初の意氣込みに反して、帝大は最初から業のことで意見が合はず不出場となり、更に始まつてから第二回目には明大と早稲田との間に又々寢業のことが問題となつて遂に自然消滅の形になつてしまひ、甚だつまらないものに終

りました。

尙右の外、團體としてではありませんが、例の明治神宮競技が始まつたのも此の頃のこととて、之には岩崎、古賀の兩君が少年組豫選に、浅見淺一君が青年組豫選に出場して大いに力戦しましたが、何れも優勝までは行きませんでした。

尙個人的の試合を擧げるならば色々面白いものもあつたと思ひますが、記憶が判然しませんから試合のことは此の位で置きます。

### (五)

(つまらないことですが最後に私が三田の道場へ這入つて行つた時のことを少し述べさせて戴きます。)

私が豫科へ入學したのは大正九年の春で、中學時代身體が人並はづれて弱かつたため殆ど全く運動から遠ざかつて居まして、四年間正科として一週間に一、二時間宛道場に行きながら、遂に白帶の域を脱することが出来なかつた私でしたが中學時代私と同様虛弱な身體の所有者であつた先輩で親戚の宮永金太郎氏が當時塾の二段で、その頃の私の眼から見れば立派な身體を見せつけて『先づ身體を造らなくちや』と口癖の様に云ひ聞かせ、私が綱町のグラウンドにベースボール等を見物して居ると、道場から聲をかけては彼が松永三段だ(松永進一先輩のこと)彼が阿部兄弟だ等と堂々たる體格の人々を指して教へて呉れたものです。そんなことが度重つて、道場の外から何も解らずながら稽古の模様を眺めて居る間に其雰圍氣が如何にも和やかであり、非常に愉快なものに考へられ出しました。夫は私の想像して居た柔道の道場とは大分異つた氣持のものでした。中學校にしてみれば四、五年生の三級位から上の選手達が十人かそこらで、お互に一度でも相手に投げられまい、一本でも取られまいとして夫々力一杯にゴツゴツの稽古をやつて居るもので、教師は之を見張でもする様な格好で凄い目をしながら眺めて居ると云ふのが、私のそれ迄に観て來た放課後の道場であつたのですから、専

門学校以上の道場と云へば、一段とか三段とか云ふ所謂猛者連が汗と脂とに汚れた柔道衣を着て、火の出る様な稽古を続けて居て、弱いものは初めから終りまで投げられ通しで鍛はれて居るものと決めて居た私でした。所が綱町の道場は私のさうした想像を全然裏切つて、殊に普通部の一、二年生位の人が進んで先生を始め高段者の人々につかまり、如何にも面白さうに、又強い者同志でも猛烈な稽古ではありますか非常に和やかに、悪い意味での頑張り抜きに気持ちよく、何時も大勢が愉快な雰囲氣の中に柔道をやつて居られるのです。何度見に行つても此の實に気持ちのよさうな光景を見て、これならば初心者の自分が只身體造りの意味で這入つて行つてもちつとも恐しくはないと考へました。全く其當時は今から考へると可笑しい様ですが『恐しくはない』と思ひました。之が綱町の道場から受けた私のファースト・イムプレッショ�다つたのです。それから稽古衣を一揃ひ揃へて、放課後は必ず道場に行き鍛はれて居る間に、益々此の初印象が如實に書きされて來て氣持ちよく揉まれて居る中に、稽古をして貰ふことは勿論稽古の合間に色々話をするにも、又稽古後の汗を流す風呂の中でも、初心者の自分が普通部や商工部の若い人達にも、強い有段者の人達にも、又兩先生にも何の遠慮もいらす、全く一つの大きな家庭の中に居る様な氣持になつてしまひ、一年と經たない間に、一日でも道場へ行かないと何だか物足りない様な感じがして來て、實の所學校には出ないでも午後からの道場には出かけて行く様になりました。爾來七ヶ年間初めて進級月次勝負に出て四級にして貰ひ、樺帶を贈られて無我夢中で當時普通部の門倉君、商工部の桐山君等と勝負をしたこと、活殺法研究會で菅原浩さんに絞めて貰ひながら手をたゞいて笑はれたこと、一級から初段の頃一日に必ず阿部兄弟四人に是稽古をして貰ふことを心中密に誓つて出来る丈け之を續けたこと、初段になつて初めて成年組から黒帯を贈られ乍ら恥かしい様で夫を結ぶ氣になれず、樺帶のまゝ稽古中を阿部英ちゃんに無理に黒帯をさせられ、皆に手を拍かれて子供の様に眞赤になつた喜び、毎年の葉山合宿と寒稽古の愉快さ、等等數へ来れば中には大分苦しいこともありました、實に懐しい愉快な思ひ出の中に、綱町の道場、三田の柔道部は一つの大きな家庭であると云ふ私の脳裡に

銘したファースト・イムブレッショーンは終始一貫快い而も敬虔な印象として、現在も確つかり私を捉へてゐるばかりか、將來に於ても尙、自分は彼の三田柔道部大家族の一員であると云ふ自尊心、例へて云へば昔の武士が俺は瘠せても枯れても何藩の何々家の出であると云ふ何ものにも犯され難い一種の尊い誇りは、過ち多い世の中に立つ自分に絶へず反省の機會と力とを與へて呉れるものと自信してゐる次第であります。

つまらない事を書きつらねて來ましたが之で失禮として戴きます。（昭和八・七・二二日 下關に於て）

## （二）昭和の天覧試合に現はれたる

### 三田柔道の眞價

吉 武 吉 雄

古來各種の武術に於て其技其力が抜群で武勇を後世に残した人は頗る多いが、その素行精神方面に突込んで研究して見ると、其技其力が抜群であると共に其精神が神々しく其技風其態度が上品で、技以外に何となく頭が下る様な眞の武道家は甚だ稀である。近代に於ても嚴の如き肉體と猛虎巨象をも取て投げる程の力と技は持て居るが、其處に品と高風を缺き所謂武術屋ヤワラ使ひと云ふ様な面白くない態度が見へ、時に或は武道家として風上に置けぬと思はれる様な人も少くないが、現今其強さ上手さを値打づける段とか級とか云ふものには、此等の黑白を混同し寧ろ強さに重きを置く傾きがあり志ある者をして武道家を輕視するの傾向なしとせない。又其勝負の態度に於ても負けねばよいと云ふ打算的精神から武人の面目も忘れて引分時間待合術とも云ふべき態度に終始して我事成れりとする連中のある事は、武道の指導法宣しき得ざ

るか、或は武道の職業化の然らしむる處か、或は武道に對する社會の眼識墮落か、何れにしても悲しむべき傾向である。

昭和の御代は、物質文明の絶頂點に達しつゝあると同時に、國民一般が軟弱の氣風に染み、殊に青年及び學生間にはヂヤヅ氣分が充滿し、國家の前途危しとさへ思はせた。此時宮内省の硬骨漢と民間の志ある士が相謀りて、昭和四年五月男子の節句を期し、宮城内覆馬場に天覽武道大試合を催し、大に國民尚武の氣風を興し、軟弱の潮流に痛棒を與へた事は誠に痛快事で、殊に天覽の光榮に浴したことは、武道家及び武道に志す者の最高の譽として人々歡んだのは當然の事であつた。

我三田柔友會員よりも、地方選手として在大阪の山川涉四段（現在五段）が出陣して準決勝戦迄奮闘し、更に専門家を主とする現代一流の實力選手を集めたる指定選手中に淺見淺一、阿部大六、阿部英兒の各五段（現在六段）が出陣し、阿部英兒君は遂に御前に於て實質的優勝試合と云はれたる栗原六段との準決勝試合に、無勝負判定負と云ふアマチュア選手としての驚異的成績を残して天下に其武名を轟かし、慶應の阿部兄弟、三田に阿部ありと國民に深く印象づけた。其模様は飯塚先生が部史の中に執筆されたから再説しないが、吾輩は三田柔道部出身の一員として親く此盛況を拜観して、何としても黙して居られない一事を茲に記して先輩に告げると共に、後進者の進むべき一つの標識としたいのである。

昭和の天覽試合は我國最大の試合と稱せらるゝ寛永御前試合に比し（剣道は別とし）、其量、其質、而して其技に於て、數歩を進めたもので、逆、縮め、固めを主とした即ち組打を主眼とした古代柔術よりも遙に進歩せるものであつて、更に準決勝よりは天皇陛下の御前に於て行はれ、前二日間の豫選勝負も各宮様方の御來臨を辱うし、總理大臣、元帥を始め文武百官綺羅星の如く居並んで拜観する其盛況は、何とも云へぬ盛大さ神々しさで、徳川將軍家が幕内に陣取てやらした寛永大試合とはとても比較にならぬ大々試合で、而も有難い試合であつた事を先づ記憶して頂きたい。

淺見君は相當の働きをしたが佐藤金之助六段に敗れ、阿部大六君は段々と抜き進んで、朝鮮柔道界の副將にて強力無比と云はれ、當時強さ元氣さの絶頂にありと云はれた古澤勘兵衛五段と取組んだが、此試合は一般拜観者が最も注目した大

試合であつた。双方引分時間近く迄戦つて居つたが、大六君は實に實に毛一本の隙を見出し石火の如き左拂腰の一手を以て形の如く見事に投げた。而して更に準決勝試合には山形の勇将尾形六段と渡り合つたが不幸固め業で敗を取つた。阿部英兒君は相當の名士三四を皆形の如く投げ、更に満洲の大將にして優勝候補山田行正六段と引組んだが、山田氏が巴投より引込んで来るのを軽くあしらい、尙も攻め込んで来る出鼻を足拂にて之れ亦形の如くズドーンと相當高く投げ付け、静肅の場内にもアツと云ふ自然の驚きの聲が上つた。而して次には其時迄名刀の如き切れ味を以て諸豪を投げて、一組の全勝者となつて靜々涼を取つて居つた朝鮮の御大將岡野幹夫六段と立合ひ、一上一下共に共に味のある位のある技を出しては攻め、攻めては防ぎ、満堂全く静まり返つて手に汗を握つたが、遂に三田の阿部君は大外刈で之をも亦ビューツと圓をなして投出した。斯くて愈々最後の日が來て、畏れ多くも御前の試合に臨み、優勝者栗原六段と秘術を盡して戦ふたが其勝負は判定にて敗れた。

私の言はんとするのは之からで、而も普通部一年生の幼少時代から綱町の道場に通ひ人となり名人となつた阿部君兄弟の事である。本大會指定選手の試合は、何れも當代第一流の士のこととて其力其技其質錄は皆堂々たるものであるが、此間に伍して美しき姿勢にて迫らざる態度と而して謙讓の美德と沈着の勇氣を發揮し、攻防自から理に従ひ息を養ひつゝ一朝隙を見出すや電光石火形の如く強敵を投げ、相手の何れもが宙を飛び圓を書いて倒れ、其投技の冴えは名刀の切れ味と云ふべく、昔嘉納講道館長は、講道館柔道の投技は敵手が紙の稽古着を着て居つても之れを破る事なくして投げ飛ばす様でなければならぬ、即ち技で投げ力で投げてはならぬと云はれたが、阿部兄弟の投げる技は全く此理想の實現とも云ふべきものであつた。正に然りであつた。昔より「道に従つて勝を制するは武道の本道にして」とあるが、阿部君の勝は實に道に従ひ無理のない眞の武道であつた。而も其態度たるや、高風と云はんか上品其ものと云はんか、其品位其氣位は斷然抜群であつて我意を得た以上のものであつた。吾輩が手洗場にて會したる老陸軍大將と老外交官（顔は知り居れども姓を

失念す」との會話にも（大將曰く）「阿部と云ふのは實に堂々たるものぢや、品位があつて古武士其者ぢや、實に上手でウツクシイ」（老外交官）『あれは兄弟ぢやと云ふが、御兩親の人格が忍ばれる』（大將）ソーデヤ誠に羨望の限りぢや』と感激して居つた。陛下臨幸御の後吾輩の席の向側、第一列各大臣、將軍連が居並ぶ前に着席したる阿部英兒君は五尺七寸五分の廿四貫（學生時代は二十一貫なりしも社會人となりて既に六年、稽古も全く不足して肥え過ぎて居つた）。威あつて猛からざる堂々たる勇姿は邊りを拂ひ、居列ぶ田中總理大臣等も貧弱に見へ下品に見へ、氣品の總てを阿部君が獨りで占領して居る様であつた。吾輩は此の光景を一目見て可笑しくて涙が出た。と同時に同席の大塚莊亮君や故中村壯吉君にドーグねと云へば、兩君も其目頭を光らせてうなづかれた。

三田の柔道部は柔道を職業とする人を養成する處でなく、塾祖福澤先生の先づ獸身を作つて人心を養へより始まり、先生の所謂心身の順是れ柔道を心とし、氣品の泉源を以て任じ、歴史を重んじ、自尊自重沈勇にして中庸に居り、着實は精神の修養を行ひ、柔道を味はひ、之を趣味として研究し、技の軟かさを賞味し、勝負は道に従つて勝ち、破れても尚耻ぢざる心意氣を以て道場に出入りつゝあるのである。從て三田出の柔道マンは其技風に軟か味と、上手味と、氣品があり、社會人として勇氣ある紳士である。

阿部兄弟は昭和の天下に名を成されたが、これは上述三田道場の歴史ある家庭が生んだ息子である。而して出陣に際し假令勝つても負けても、武士として耻ぢるが如き心も起ずな行もするなど、其氣持を三十一文字に現はして與へられたあの賢母堂の御存在が、一層兩君を美しく育て上げられたのだ。

三田柔道部は百年も千年もの歴史を續けて行くであらうが、特筆大書すべき前代未聞の御前試合にアマチュアの三田柔友會員が出て優秀の成績を示し、面も氣品と技に於て正に天下第一なりと激賞されたと云ふ事を書き残して置き、更にそれは光輝ある六十年の歴史を有する三田道場のみで育たれ、段なぞ眼中になく趣味として柔道を味ひ、不撓不屈之に精進

された人であることを特記して三田の誇とし、又一千の紳士を育て上げられた飯塚師範の御指導が如何に徹底して熱心であるかを記し置き、今後三田柔道部に遊ぶべき幾千幾萬の後進に向つて以上の事を知らしめ、次の御前試合には第二の阿部となり、更に夫れ以上となる事を心懸けられ、而して吾人の學ぶべき柔道は氣品ある精神的武道であつて、而も技術も分合ひも抜群である事恰も此阿部君の如かれと云ふ事を書き残して置きたい。

此機會に一言したきは、三田柔道部では講道館武徳會等の如く、段の上位な者がエライのでは斷然ない。強くて精神的にリツバで、即ち人物がしつかりして居らねば尊重されぬ歴史があり、勝負合ひのみ強くても下品で人物が出来て居らねば、普通部の子供からも馬鹿にされる歴史がある事を後進者の爲に一言して置きたい。段は講道館の試合の結果であり、三田道場内で自然値打づけられる段は、強さのみではパスしないのである。（昭和八年盛夏 於幽嶺小湧谷）

## 柔道部十八景（終）